

# 三人の盗賊

喜劇四幕

八木柊一郎

登場人物

マチ子  
カオル  
レイ子

三人姉妹

イカケ屋  
キリスト  
ピッコロ

泥棒たち

三神氏（娘達の父親―声のみ）  
病院の係員 A  
病院の係員 B

\*

三神氏の山荘における、ある夜更けから翌朝までの出来事

## 第一幕

装置は四幕通して同じ（山荘の居間）。舞台正面が大きなギロチン窓で、下手の扉は玄関へ、上手の扉は娘たちの寝室へ通じる。

長椅子、ソファ、小卓、すべて古ぼけた家具。壁に羚羊の首の剥製が飾られ、舞台奥やや上手には、大きな植木鉢を底にして針金と白い紙テープで作ったるつぼのような仕掛が置いてあり、その中に三つのゴム風船が浮かんでいる。

夜。

部屋の中はひどく散らかり、半分開いているギロチン窓を透して、高原の闇が見える。

末娘のレイ子が長椅子に寝そべり、カオルはマントルピースに肘をつき立ったまま本を読んでいる。

そして長女のマチ子は、幕があく前からロングドレスをひきずりながら、部屋の中を歩き廻り、幕があいたときにはすでにぶつぶつ呟やいている。

マチ子 ……わたしがどんなにあなた方のことを思っているか、どんなにこれから先のことを心配しているか……（立ちどまり、急に芝居がかりに）ねえ、わかっているの？ わたしがどんなにあなた方のことを思っているか、どんなにこれから先の事を心配しているか……、宜しいの？ この三神家は、破産しかかっているんですよ。やがてこの家にも、居られなくなるでしょう。そうして、どんなに居心地が悪くなったといっても、今となってはわたし達が身を落ち着けていられる場所であるこの別荘からどここという当て

もなく出て行って、三人が三人、どんな恥を忍ばなければならなくなるか分らない。わたし達は女だから責任はない、けれど、女だから余計考える必要があるんです。……本当をいえば、人の良いお父さんをもっと監督する義務がわたし達にはあった……

レイ子は天井を向き、カオルは本に熱中して、全然聞いていない。

マチ子 (妹たちの無関心を別に気にせず) お父さまは、今夜帰っておしまいになる。その前に、わたしはどうしてもあの人についておこなくちやならない。わたし達はまだ生きる権利がある、このまま生きてゆく権利がある、って。

カオル (ゆっくり顔を上げて) お父さまが人が良いって……？

マチ子 今頃そんな言葉がきこえたの。(レイ子を振返る)

レイ子は身動きもしない。マチ子は上手奥に行き、風船を一つ持上げる。(紐の先に錘りの小箱がついている)

マチ子 (小箱を見ながら) お母さんが遺してくれたこの宝石を全部売ったとしても、一年も暮せはしない。……わたし達は働かなくちやなくなるでしょう。みんな揃って結婚することより働くことの方がまだ易しい。(風船を置き、中央へ戻りながら) けれどねえ、働くことって、どういうことだか分る？  
レイ子、……カオル。あんた、何読んでるの。

カオル 憲法よ。

マチ子 ケンポウ？ 司法試験でも受けるつもり？

カオル 試験を受けるとすれば、外交官試験の方がいいわ。……（急に調子を高く）お姉さん、わたし、テキサスへ行きたい！

マチ子 （あわてたように、なだめて）まあまあ、どこへでも。ね、カオル、あなたは本が好きでしょ、静かにお読みなさいね、何にも考えないで。（レイ子に近づき）また悪いようだね、カオル……

レイ子 ……（黙ったまま、じっとマチ子の顔を見つめる）

マチ子 何をそんな風になたしを見るの。他人の眼のよう。お医者さんの眼のよう……。疑っているんだね、わたしを。わたしの方がカオルよりもっとひどい病気にとりつかれてると思っっているんだ。そうしておまえは、わたし達二人の看護婦のつもりでいるんだろう。（レイ子の背後に廻りながら）わたしとカオルのために、おまえは自分の青春を犠牲にする必要はないよ。街の灯が恋しかったら、恋人が欲しかったら、ハイヒールを穿いて歩きたかったら、さっさと山を下りて東京へ帰るといいよ。

レイ子 （向うを向いたまま）それは違うわ。……たとえお姉さん達がここに居なくなっても、わたし一人はこの家に残るでしょう。もし東京へでも大阪へでも本当に行きたくなったら、お姉さん達二人が死にかかっている時だとして、わたしは出て行くわ。

マチ子 死にかかっている時？ レイ子！ おまえが一番悪いんだ、ほんとは。おまえだけが病院へ行く必要があるんだわ。……（泣きそうになりながら）わたし達が死にかかっている時でも出て行くな……（本当に嗚咽し始めながら上手の扉から出て行く）

——沈黙。

ギロチン窓から、少しずつ男の頭が浮びあがる。続いてその隣りにもう一人、また一人、三人の男が顔を現わす。

扉が動くとき三人の男の首はすばやく窓の下にかくれ、マチ子が悄然と入ってくる。

マチ子 （かぼそい声で）レイ子さん、仲直りしましょう。……今夜のお芝居、一緒にやってくれるでしょう。

レイ子 （だるそうに腕を伸ばして）ええ。（マチ子がいっまでも握っていようとする手を振り離し）でも、もう同じところはいやよ。前に進むんでなくちゃ。

マチ子 勿論よ。もう場面を変えなくちゃならないと思っていたの。

窓から首が一つのぞくが、すぐ一本の腕が伸びてそれを下へ押し戻す。

カオル さっきのお姉さんのセリフ、ちょっとよかったわ。……今となってはわたし達が身を落ち着けていられる最後の場所であるこの別荘から、どこという当てもなく出て行って……

マチ子 ばか。お芝居だと思っているの、あんたは……。もう一度いわなくちゃ。いい？ カオル、レイ子。（噛んで含めるように）わたしがどんなにあなた方のことを思っているか、わかっているの。どんなにこれから先のことを心配しているか……よろしいの、この三神家は。

カオル うふ……、それごらんない、そっくり同じ言葉。一字一句違わない。

マチ子 同じ事柄をいえば同じ言葉になるのはあたりまえじゃないの。

レイ子 実際の会話は、そうはいかないものよ。

カオル そう。

マチ子 いいわ、あなた達は二人してわたしを……、わたしがどんなにあなた方のことを思っ……（烈しく  
嗚咽する）

下手の扉が開く。

三神 （扉の外で）レイ子。……レイ子。

マチ子、戸口へ行く。

三神 あんたじゃない、レイ子……

レイ子、やっと立上り出て行く。

扉が閉まったあと、マチ子はちよつとそのまま立ちつくし、崩れるように長椅子に駆けよって泣き出す。

マチ子 ……カオルさん、二人で家出しましょう。今度こそ実行しましょう。こんな山奥にわたしはもうい

られないわ。街へ行って商売を始めましょう。

カオル そうね……（上の空）

マチ子 一体、何年ここにいたことかしら。

カオル 三年よ。

マチ子 （又嗚咽して）お母さまが生きていたら……、誕生日の日には、必ず新しい着物を御自分で縫ってくださった……、あんたは、覚えている？ お母さんの顔。

カオル 知らないわ。

マチ子 レイ子は覚えているよ。

カオル 嘘よ。

マチ子 でもわたしは、着物が嫌いで、裾の短い洋服ばかり……、レイ子は残して行くつもりだけど、あんたはどう思う？

カオル そう、ね……

マチ子 かわいそうかしら。

カオル 三人が三人、一緒に出て行くんでないとしたら、誰かが一人残るか、誰かが一人出て行くかね。

（少し早口に）もし一人で出て行くのがわたしでないとしたら、それはお姉さんかレイ子かどちらかよ。

そうして、もし一人残るのがわたしでないとしたら、それもお姉さんかレイ子かどちらかね。

マチ子 じゃあ、どんな場合でもわたしかレイ子が……？

カオル うふ……、今日はわたしの方が頭がいいわ。いい？ お姉さん。ここを出て行くのが三人一緒でなくて、今までのように三人揃って家にもいないとすれば、誰かが一人出て行くか、誰かが一人残るかなの



よ。そうして……

マチ子 (真面目に) あなた、憲法など読むの、およしなさい。わたしはあんたがそんないい方をするのを黙って見ていられないわ。法律書というものの中には、人間的な切なものが欠けているのよ。それに、これは、女には絶対わからないように書いてあるのよ。あんただってわかってやしない……。あなたはまだしも、(涙ぐんで) テキサスへ行きたいっていった方が、わたしには安心だわ。

カオル (当惑して) お姉さん、わたし、今何かいった？ ……もし三人一緒に出て行くんでないとしたら……

マチ子 やめて！ ……ねえ、カオル、わたし達はお互いにいたわり合わなければいけないのよ。世の中が冷めたいものだということ、あなた、知ってる？

カオル ええ。……けれど、地球は、火星よりは暖かいんでしょう。

マチ子 (本当に怒って) そういういい方をやめてっていつてるのよ。憲法なんか読むの止めてっていつてるのよ。(カオルの本をひったくり、暖炉に投げ入れる)

カオル 火は入っていないかったわね。(暖炉の中に入り込み) ……いつの間にこんなに、みんなお姉さんが……、マキャベリなんか読むのやめて、人間機械論なんか、芸術経済論なんか……、あんたは天保生まれでもあるの、梅暦だなんて、……犯罪統計学、そんなものやめて、天国とは何か、馬鹿らしい、やめて……やめてやめて……

マチ子 カオル。

カオル あら、わたしが探していたボールとヴィルジニイ、こんなところにあった。

マチ子 ああ…… (あきれて長椅子にもたれる)

カオル (本をかざして暖炉から首だけ出し) ナポレオンさえもこれを読んで涙を流したという、人類の有する最も深く、美しく、悲しい恋物語、ポールとヴィルジニイ……

マチ子 ああ…… (子供のよう泣き出す)

カオルは暖炉に入ったまま読み始める。三人の男の首がまた少しずつ浮びあがるが、扉が動くはずぐひっこむ。

レイ子 (戸口で) お父さまがお立ちよ。

マチ子、涙をぬぐいながら出て行く。

窓の外の泥棒たち、今度は安心して中を覗き、何やら手真似して話しているが、突然暖炉からカオルが飛び出すと、驚いて身をかくす。そしてカオルが部屋を出たあとまた首をのぞかせ、レイ子が戻ってくる。と、又ひっこむ。

レイ子は、上手奥のカーテンをあけ、外を眺める。

しばらくして車がスタートする音が聞え、マチ子とカオルが戻ってくる。

カオル レイ子さん、お父さん破産したとかしそうだとか、いったた?

レイ子 いいえ。……少なくとも三ヶ月間の生活費は、いつものようにいただいたわ。

マチ子 (心配そうに) そのあとは?

レイ子 また三カ月の分を持ってきてくれるでしょう。  
カオル その次もね。

カオルは又本を読み始め、マチ子は身も心も疲れたという風にソファへしなだれかかる。レイ子は、二人を代る代る眺めているうち、何かハラハラしてくる。

レイ子 (無理に元気を出して) さあ、お芝居を始めましょう。大きいお姉さんに小さいお姉さん。

マチ子とカオル、びっくりしたようにとび上り、羚羊の剥製に近づき、その口にさわる。窓の外の三人が一樣に首をもたげ、すぐひっこめる。レイ子が電燈のスイッチをひねり舞台暗黒になるが、長椅子の前でカオルが花火に火をつけると、三人の姿が浮びあがる。花火が消えた瞬間、青いスポットライトがポーズを作った姉妹たちを照らし出す。

マチ子 …… (悲劇的な調子で) ああ何ということだろう。やがて時がたつと、わたし達も永久に行ってしまうって、人はわたし達を忘れてしまうだろう。わたし達の顔も、声も、わたし達が何人いたかということも、みんな忘れてしまうだろう。

カオル 一番おしまいからやるの、お姉さん。

マチ子 もうこのところしか残っていないのよ。レイ子が同じところの繰返しはいやだというから。  
レイ子 そこも、もう演ったわ。

マチ子 そう？ ……（カオルに）やったかしら。

カオル そうだったかしら。

マチ子 じゃ、モリエールよ。いい、カオル。

カオル、部屋の隅においてあったケープを着て中央に立つ。

レイ子は少し離れて坐る。

マチ子 （カオルに） ……ドン・ジュアンさま。あなたは私をまだ覚えていらっしゃるでしょうか。せめて

ものお情けに、お顔なりとも見せて下さいませでしょうか。

カオル 実際おどろきましたよ。あなたがここへ来るとは思いもかけなかったんですからね。

三人の泥棒たち、皆顔を現わし、次にマチ子がしゃべっている間に部屋の中に侵入する。

マチ子 そうでございましょうとも。お待ち遊ばしていませんでした。わたしにはよくわかっています。

どう考えてみましても、棄てられたのだと、そう信じるほかはないのに、まだそれに希みをかけている私の無邪気さ、心の弱さにはほんとにわれながら感心しているのでございます。自分から欺かれていたと望んだり、われとわが眼を疑ったり、自分の判断を自分で消したりする、それほど私は心のよわい女でございました。いいえ、むしろ愚か者でございました。あなたのお情けが段々ゆるんでゆくのを見ましても、あれやこれやと理屈をつけて、いとしい恋しいの想いを慰めていたのでございます。けれど、こうし

た御応待をうけてみますと、もうもう私は疑う余地はございません。私にくだすった今の最初の一眼、それだけでもって、私には知りたくもない数々のことがわかりました。しかし私は、あなた御自身のお口から、この度のお旅立ちのほんとうのわけがらを話していただきたく存じます。ね、ドン・ジュアンさま、お話し下さいまし。お願いです、何とおっしゃっていいわけなさるか承りたいと存じます。

カオル そのわけなら、ここにいるスガナレルがよく知っています。

カオルが指さしたところに泥棒たちがいる。しかしカオルもマチ子も芝居に全く入りこんでいて、見知らぬ男たちをすぐには変に思わない。

イカケ屋 俺がか……

マチ子 (泥棒の方に) じゃスガナレル、お話し。誰の口からでもかまいません。その理由を訊きましよう。

カオル さあ、奥さまに話してお上げ。

イカケ屋 どういったものかな。

マチ子 さあ、こちらに近づいて、なぜまたあんなに急に旅立ちなすったのか、そのわけを少しお話し下さい。

カオル おまえは返事をしないのか。

イカケ屋 泥棒をからかうもんじゃねえ。

カオル さあ、返答しないのか。

キリスト 旅立ちのわけは、金をもらいに。

マチ子 ドン・ジュアンさま、スガナレルの口から奇妙なことを聞きましたけれど、どうかそのわけを説明して下さいませ。

カオル 実を申せば……、お金を……（泥棒たちの存在を变に思い出し、黙ってしまう。あわてた風）  
イカケ屋 俺たちはな。（もぞもぞする）

マチ子 おいいわけの方法はいくらでもございましょう。そんなにおあわてになるのを見ますと、私すっかりお気の毒になってしまいました。なぜあなたは知らぬ顔して……（ふと気がついて、不思議そうに泥棒たちを眺める）

レイ子は前から泥棒たちの侵入をみて、はらはらしていたが、姉が二人とも気がついたのを見、飛び出してくる。

レイ子 （作り笑いをしながら）うふ……、あなた方、お上手ね。……お姉さん、驚かせようと思って今まで黙っていたんだけど、この方たち、お芝居の相手役になっていただくためにお呼びしたの。……村の人なの。

マチ子とカオル、暫らくポカンとしているが、ぴよ、こんと頭を下げる。

レイ子 それでね、ちょっと打ち合わせをしなきゃならないんだけど、席をはずしてもらえない？ この人

たち、恥かしがりやなの。  
マチ子 いいわ、ほほ……

二人が部屋を出ようとする時、泥棒の一人が追いつがるが、レイ子がおしとどめる。

レイ子 (扉を閉め、その前に立って) 姉たちは、病氣なんです。つまり頭が悪いんです。何もしないでちようだい。お金はあまりないけど、欲しい物は何でも持って行って。……静かにして欲しいの。(泥棒たちのうち一番若いのが風船を眺めているのをちらちら気にする)

キリスト 電話は？

レイ子 そこを出て、廊下の突きあたりです。

イカケ屋 ピツコロ、電話線を切ってきた。

ピツコロ あいよ。(下手の扉に消える)

イカケ屋 気ちがい邸とはな。え、キリスト。

キリスト ところで今のセリフは出まかせか。それとも、若いのが三人、それぞれ何のお相手だか知らねえが、ここへやってくるのか。

レイ子 いいえ、誰も来ません。

キリスト 雇人は？

レイ子 誰もいません。

イカケ屋 誰も？

レイ子 ええ。わたしが食事をつくって、あとは、別にすることもないので……

キリスト ふん、見れば、ここ二、三年掃除もしてねえらしい。

イカケ屋 女ばかりじゃ、ぶっ、そうじゃねえか。

キリスト 馬鹿……

レイ子 あの、あなた方に、お芝居をしてもらいたいです。わたし達がいうセリフに調子を合わせて欲しいんです。姉たちにシヨックを与えたくないのです。

キリスト 芝居だって？（おどけて）ドン・ジュアンさま、あなたは私をまだ覚えていらっしやるでしょうか。せめてものお情けに……

イカケ屋 おい、キリスト。おまえの物好きで、俺たちがひでえ目に会ったことを忘れたか。

キリスト 俺がいなけりやこの家で仕事をするわけにや行かなかったんだぜ。

イカケ屋 有難くもねえや。高え汽车租赁って、こんな山奥まで……

マチ子 （扉の外で）レイ子さん、まだ？

レイ子 ええ、もうすぐよ。……あの、お名前を。

イカケ屋 え？

キリスト あっはは……、泥棒に入って自己紹介か。よかろう、こいつが……

ピッコロ （戻ってくる）切ってきたぜ、兄貴。

キリスト 本名はまあカンベンしてもらおう。この兄貴がイカケ屋、こいつがピッコロ、俺がキリスト様だ。

レイ子 イカケ屋さんに、ピッコロさんに、キリスト様……



ピッコロ さ、さんなして呼んでもらいてえな。

レイ子 ほほ……

イカケ屋 何がおかしい！

レイ子 いえ、そういうセリフのある芝居を思い出しましたの。では、姉たちを呼びますからお願いしますわ。……そうそう、失礼しました。わたしは三神レイ子、上の姉がマチ子、下の姉がカオルと申しますの。

ピッコロ (真似て) 申しますの。

イカケ屋 ピッコロ！

レイ子 (扉をあけて) 大きいお姉さんに小お姉さんちい、どうぞ。(マチ子とカオル、おずおずと部屋に入ってくる) 御紹介するわ。(小声で) 特別な呼び名でいって欲しいという御希望なので……、こちらがイカケ屋、……キリスト、……ピッコロ。

マチ子とカオル、丁寧に会釈する。

マチ子 レイ子さん、今度はわたしに打合わせをさせて。……ね、やっぱり一人で。(妹たちに目で退場するよう促がす)

レイ子とカオル部屋を出る。

マチ子 ……どなたがお首領<sup>かしら</sup>？

泥棒たち、ちよつと気色ばむ。

イカケ屋 おまえが一番の姐御か。

マチ子 わたしにはわかつてます。あなた方は、泥棒でしょう。

キリスト 気ちがいにもやっぱり分別はあるようだ。

マチ子 いいえ、病気なのは妹たちです。お願いです、泥棒さん。……レイ子は、前から退屈そうだった。

女ばかりのお芝居ではやはり物足りなかったらしいんです。だから、さっき現われたあなた達を、相手役  
& と思いこんで……。妹を可哀そうだと思つてください。本当に、お芝居をなさってください。わたし達の

三ヶ月分の生活費、今日父から貰ったばかりのお金をみんな上げます。

イカケ屋 三カ月分か。……おまえさん方、一カ月幾らで暮していなさる？

マチ子 ……さあ。

イカケ屋 御存知ない？

マチ子 現金はレイ子が扱っているので。

イカケ屋 気ちがいの妹が会計係ってわけか。

ピッコロ あっはは……、誰が正気なのかわかるものか。俺はもう退屈したね、兄貴。いただくものをいた  
だいて、さっさと引揚げようじゃねえか。こういう陰気な家には長居は御免だ。ナフタリンの匂いがすら  
あ。

マチ子 おだまりピッコロ！

ピッコロ ……（びっくりしてつまずく）

マチ子 あなたなどにこの家の空気がわかってたまるものですか。あなた方の知らない、あなた方が見向きもしないところで、本当はあなた達にとっても一番大切なことのために、死ぬほど苦しんでいる人間がいることを、あなた達は一生気がつきもしないんだわ。いい気なものよ、本当にわたしから見れば、呑気なものよ。（キリストが何か云いかけるのをおさえ）あなた方は、わたし達が金持の子に生れたから、気持のいい部屋ときれいな庭のある家に生れたからと云って羨やましがるんでしょう。軽蔑しながら物欲しそうにじろじろ見るだけで、わたし達がどんな犠牲をはらって生きているのか、そんなことに気がついたためしはないのよ。あなた達が立派な泥棒なら、わたし達の一番大事なものを盗んで行くといいわ。そうして、わたし達をなきがらのようにここへ残して行って、もう考えることも苦しむこともなくなったわたし達に、自分で自分の家へ火をつけさせるようにするといいわ。…：…けれどあなた方が欲しいものはただお金。お金に代えられる何でも。あなた方はせいぜい自分たちの儲けを忘れないようになさい。

三人の泥棒、しゅんとして顔を見合わせる。

ピッコロ （照れくさそうに）へへ…：

マチ子 では、妹たちを呼んで来ます。（出て行く）

キリスト （独り言）もう芝居は始まっているらしい。

ピッコロ 今の姐御の啖呵で、ちよっと心臓が踊ってきたらしいや。

イカケ屋 惚れたか、あの女に。

ピッコロ ちえっ、兄貴はすぐそれだ。もっとも、あいつ、わたし達の一番大事なものを盗んでゆくとい、といったな。

キリスト 馬鹿野郎、いいか、ピッコロ。立派な泥棒というのはな、黙っていて相手にものを出させる奴というんだ。何だかわからねえが、俺は、金ではないものを、それ以上のものを盗んでやるぞ。

カオル、一人で入ってくる。

カオル 今度は、わたしが打合わせに来ましたの。

イカケ屋 手数がかかるんだな。

カオル 気にしないで下さいね、姉と、妹……、ちょっとヒステリイがひどいので。

イカケ屋 おまえさんは、俺たちが村の若い衆と知っているんだな。

カオル (色っぽく) ほほ……、知ってますわ。あなた達、泥棒だということぐらい。あの、ギロチン窓から入ってきたんでしよう。

ピッコロ ギロチン窓？

イカケ屋 きいたのか、姐御に。

カオル いいえ、姉と妹は、あなた達をお芝居の相手役をするためにやって来た人だと思ってますわ。あの二人は普段難かしいことをいいますけど、割合何でも信じ易いんですの。……でも本当のことはいわないでおいて下さいね。うまくお芝居をやっていたら、喜ぶと思うの。お礼に、わたしのお小遣いを全

部あげますから。

イカケ屋 幾ら持ってる？

カオル うふ……、それはいずれわかるじゃありませんか。……ではお願い。(戸口へ行きかけるが、戻って)あなた方も、時には物を盗む家の人たちのために何かいい事をしておけば、それだけの報いがあるでしょう。それに、わたし達のこの家は、訪れた人の誰にも特別な思い出を残させるんです。あなた方が泥棒だとしても、例外ではないと思うの。

イカケ屋 特別な思い出？

カオル ええ。

ピッコロ そんなものは俺たちにや多すぎらあ。

キリスト 普通の思い出が欲しいか、ピッコロ。

カオル うふ……、気がつかないでごめんなさい。あなた方泥棒にとっては普通の思い出となるでしょう、きつと。

イカケ屋 (鋭く) わかったようなことをいうな。

カオル あなたが一番の人？ 一番上の人？

イカケ屋 だからどうした？

カオル お芝居、やっていただけでしょ？

イカケ屋、当惑したようにカオルを見つめ、キリストの方を振り返る。カオル、二人を見比べているが、ピッコロが風船を見ているのに気がつき、その方をじっと見つめ出す。するとキリストもカオル

の視線を追ってピッコロの方を向き、イカケ屋も同じように眼を向け、絶えずゆらゆらゆれている三つのゴム風船が、沈黙と四人の視線によってくつきりと浮かぶ。

扉が音もなく開いて、マチ子とレイ子が入ってくるが、部屋の中の異様な空気に触れ、それに逆らわぬように壁に身をくっつけて、やはり風船を眺める。

ピッコロはみんなが自分の方を見ているのに気がつき、あわてたように向き直る。

ピッコロ (照れかくしのよう) あっはは……、芝居だって……？

キリスト (低い声で) どうせここで夜を明かすつもりで来たんだ。……つき合おう。

キリストの言葉が切れた途端、ピッコロが風船を一つ破る。大きな破裂音がひびき、カオルとマチ子はびっくりして飛びあがる。

キリスト あっはは……

三人の娘は、自然にひとかたまりになり、泥棒たちを眺めている。

—幕—

## 第二幕

第一幕の直後。

部屋の中は比較的整頓され、泥棒たちと娘たちが、羚羊の剥製の前に何かの儀式をやるような神妙な様子で並んでいる。シャンデリアの灯りは消され、どこからか入ってくる一条の光りが羚羊の首を照らしているだけである。

マチ子 お芝居をする前に、わたし達は、いつもこの羚羊の首に手を触れます。この羚羊はわたし達の生れる前からこの部屋にあって……

カオル わたし達姉妹に、何かしら名状し難い靈感を与えてくれます。あなた方ど、ど……（あわてて口をつぐむ）

マチ子 どうぞあなた方からお先に……

キリスト、ピッコロを促がす。ピッコロ、先ず剥製の口に手を触れ、続いてキリスト、イカケ屋、マチ子、カオル、レイ子の順に触れる。

マチ子 さあ、始めましょう。

マチ子とカオルは上手の椅子へ、キリストとピッコロは下手の椅子に分れて坐り、イカケ屋とレイ子

が舞台中央に残る。

レイ子 (イカケ屋をソファに坐らせながら) あなたは、私の別れた夫。……別れたのは私の方から。(胸をさして) 私は、ここに傷があるの。

イカケ屋 何の傷が。

レイ子 ケロイド。

イカケ屋 ケロイド……？

レイ子 なおらないの、決して。ときどき黒い血を吐いて、二年か三年後には、死ぬでしょう。

イカケ屋 もう始まっているのか、芝居……

レイ子 (黙ってうなずき、ソファから少し離れる)

イカケ屋 あの、ケロイドってえのは……

レイ子 (近づいて小声で) 原爆の放射能で受けた傷よ、火傷よりひどい……

イカケ屋 (真剣な顔になって) 火傷より？ ……顔に？

レイ子 いいえ、胸に。

イカケ屋 俺の女房は……、いや、おまえさんだけ。……(唐突に) どんな気分がするんだ、その、ケロイドってえやつは。

レイ子 別になにも、何の感じもないの。

イカケ屋 じゃなにも感じずに楽に往生出来るってわけか。

レイ子 いいえ、私には休息というものは永久にやって来ないでしょう。死ぬ時も死んでからも、私の心の



中の憎しみは、いつまでも生きつづけるでしょう。

イカケ屋 憎しみって？

レイ子 夜も昼も突きさす相手を探している細いキリのような憎しみ。

イカケ屋 それで、苦しんでいなさる……

レイ子 いいえ。私が憎んでいるものに手を触れることもできない、千分の一の仕返しもすることができない、それを悔やんでいるの。それを口惜しく思っているのよ。

イカケ屋 復讐、という考えだな。

レイ子 いいえ、それが出来ないという考え。

イカケ屋 女の身ではな。

レイ子 いいえ、人間の身では。

イカケ屋 それじゃあ、神さまに任せるんだな。

レイ子 いいえ、誰にも任せたくない。

イカケ屋 それじゃもう、暴動だ。

レイ子 私は一人です。

イカケ屋 同じケロイド仲間を集めて。

レイ子 みんな死にかかっています。

イカケ屋 ……諦めるんだな、復讐は。

レイ子 それが出来ない。

イカケ屋 女だからな。

レイ子 いいえ、人間だから。

イカケ屋 人間なら、我慢するんだな。

レイ子 ええ、私は、一生懸命我慢しています。朝から晩まで毎日我慢しています。けれど、私の胸のケロイドは、それでも削ってもあとからあとから火山の熔岩のようにもりあがってくるんです。それと同じ、私の心の中の憎しみは、我慢しても我慢しても、抑え切れずに……

イカケ屋 わかった、よくわかった。けれど、おまえさんはなぜ亭主と、つまり俺と別れたりする？

レイ子 私は、それはおかしな女になっているのよ。私の傷が、ケロイドが、私をまるで別な人間に変えてしまったんです。……（優しく）私の血の中には、小さな変わった動物がいっぱいいて、胸にはきれいな胸飾りがあるの。（低く笑って）……私のケロイド・レース。……（イカケ屋の腕をとって、下手の席へ導きながら）千切れても千切れても、知らないうちにつくろってくれる私のケロイド・レース……、親切な人々のために祈りましょう。ケロイド・レースを持っていく人も持たない人も、生きたい人も死にたい人も、すべて、海の彼方の救世主たちに、今日は間に合ってます、と挨拶しましょう……（上手の席に戻る）

マチ子とカオル、続いてキリストが拍手を送る。

ピッコロ （急に立上って）俺は知ってるぞ、ケロイドってえやつを……。そりゃ、ひでえものだ。

キリスト どこで見たんだ。

ピッコロ ジキパンのお松だよ。

イカケ屋 あいつが？

ピッコロ 面倒なセリフは吐かねえが、いつも同じことを繰返しぶつぶついつてる。

レイ子 何ていつてますの。

ピッコロ へっ、おまえさんがたに聞かせられるようなしろものじゃねえ。

カオル ジキパンって……

ピッコロ おまえさん方よりずっと下等だが、ずっと優しい女さ。

キリスト (制して) ピッコロ……。

ピッコロ、腰を下ろす。同時にカオルが立ってピッコロの席へ行き、腕をとってソファに導く。

カオル あなたは、私の夢に描いた恋人、……いいわね。

イカケ屋 いい役だな、ピッコロ。

ピッコロ (得意そうに) ふん。

カオル ……ピッコロさま。

キリスト あっはは……

カオル ピッコロさま、何年と何日の間、あなたをお待ちしていたことでしょう。恋とは、唯一人の定められた相手、生れる前からきまっていた方へ捧げられる、その方にしか見えない一つの透明なガラスの塊りなのです。

ピッコロ ガラス……？

カオル はい。

ピッコロ 俺はもやもやしたガスのようなものかと思ってたが……

カオル それなのに、此の世の人々は、そのようなガラスを私が持っていることを知らないのです。誰も気が付かないのです。ピッコロさま、あなたばかりは、私の心の中の三角形のガラスをよもお疑いではありますまい。

ピッコロ それは三角形なのか。

カオル はい、決して擦りへることのない、ダイヤよりも硬い三角形のガラスですわ。ダイヤの屑で自由に切れるガラス、そのような作りものの恋は、どこにでもございます。それはお金で買えるのです。そうして、この世の人々には、胸の中に硬いガラスを抱えていることは、窮屈でもあるし傷をつけられる心配もあるのです、売物のガラスの方が便利なのです。でもピッコロさま、信じて下さいますか。私の恋が売っている恋とは本当に別ものであることを……。もっともこのような言葉はその売物のガラスがやはり呟くことですから、私はあなたに確かな証拠をお目にかけることができません。私は死ぬほどあなたに恋をしている、生涯に唯一度の恋です、こんな言葉はガラス工場に行くともう滅茶苦茶に砕かれた再生ガラスの山の中に埋まってやがて一緒に火に溶かされるのを待っているのです。私はうっかり同じことが云えない……。それを思うと辛いのです。その口惜しさを考えていると息もつまりそうに辛いのです。なぜなら、贖物たちがもう使い古して捨ててしまった言葉が、それが私には全く何と云ってもかけがえのない真実の言葉なんですから。一体どうしたら、本当の私のガラスを人に信じさせることができるのでしょうか。私は、よく切れるナイフで私の胸を切り披きたい。そして、虹色にひかるガラスの光りを疑い深い人々の眼にあてて、みんなを盲目にしてやりたい。……。それで私の息が絶えても、私は本望ですの。

ピッコロ (スピンドル・ナイフを取出し、バネを押して刃をきらめかす) ……これでやるか。

カオル どうぞ切って下さいませ。もしあなたが私を疑われるなら。……けれどあなただけはその必要がありません。あなたには見えるのですから。私が恋しているのはあなたなんですから。

ピッコロ (ナイフを持って余し、自分の腕に切先をつけ、つい力がはいつて、痛みで飛びあがる)

カオル あなたに初めてお目にかかったのは、(ピッコロ、きき耳をたてる) ……ある夏の日、血を吐くよ  
うな暑さの、海岸でございました。

ピッコロ 俺は全然、気がつきもしなかったが……

カオル そうですわ、ピッコロさま。浮気心なら知らないこと、真実の恋のガラスを持った私が何で見知らぬあなたに声をかけられましたよ。

ピッコロ このピッコロの胸に、抱かれないとねがう夜はなかったのか。

イカケ屋 いいぞ、ピッコロ!

カオル 夢みるだけで沢山でございました。

キリスト あっはは……

ピッコロ (だんだん調子に乗って) それは一体、何としたこと……

カオル おわかりになりませぬかピッコロさま。私の恋は、寢床に臥して一寸ほども動かせぬ重い病人と同じこと、私のガラスはそれほど硬く結晶していたのですわ。この世の中の人々は、恋の歓びは恋する者同  
志が抱き合うときに、眼と眼を見交すときにあるものだと申します。けれど私にはもともと歓びなどとい  
うものは関係がございません。名状し難い心の焦りを、一秒一秒じつと堪えていることだけが私にできる  
恋の仕事だったのです。……そうですわ、ピッコロさま、それは、もはやこの世に永らえ過ぎてしまった

老人の悔恨、難破した船にたった一人生き残って、マストに首を吊る縄を編んでいる狂った船長の心にも似た、希望のない世界なのですわ。……さあ、ピッコロさま、参りましょう。

ピッコロ どこへ？

カオル おわかりではありませんか。私たちの結婚の場、断頭台へですわ。……さ、ピッコロさま。

カオル、ピッコロの手をとって窓際へ連れて行き、ギロチン窓を持ち上げる。そしてピッコロを窓を背にして立たせ、上半身を反らせ首を窓枠の上におき、自分も同じようにして並ぶ。

カオル 聞えますか？ ピッコロさま。

ピッコロ 何が……？

カオル 音が……。あれこそ、本当のピッコロの音ねですわ。そうして微かにカデンツァをかなでているのは、私の音、ヴァイオリン……。

この時、上げた窓ガラスがギロチンのように落ちてくる。

ピッコロ うわっ……（あわてて身を起し、窓から離れる）

イカケ屋 あっはは……

カオル（身を起し、ピッコロに近づいて）これで終りですわ。ほほ……（ピッコロの手をとって歩き、舞台中央で別れて自分の席に戻る）

マチ子とレイ子、キリストとイカケ屋、共に拍手を送る。

マチ子が立上り、泥棒たちの席へ進むが、同時にキリストも立上り、二人はソファの前で向かい合う。

キリスト 俺の役は？

マチ子 あなたは、あなたですわ。

キリスト というと……

マチ子 イエス・キリスト。

キリスト 成るほど。(莊重に腰をかける)

マチ子、キリストの前にひざまずき、合掌する。

キリスト、気づまりそうに仲間の方を振り向き、カオルとレイ子の方を眺める。

マチ子 (ちよっと横を向いて) ……こうして手を合わせていても、私は、何にも祈っていない。

マチ子、立上って二、三步あるき、また蹲まる。キリストはマチ子が立上った時に初めて彼女の方に顔を向ける。

キリスト ……(立上って何かいい出そうとする)

イカケ屋 (歌舞伎の大向うが声をかけるように) ……キリスト!

キリスト おおわが魂よ。汝、なんぞうなだるるや。何ぞわがうちに思い乱るるや。

マチ子 (顔を上げて) 思い乱れているのは、わたくしではございません。私は、既に懺悔を終った臨終の女のように、眼をいっばいに見ひらいて諦めております。

キリスト (腰を下しながら、乱暴に) それじゃあ、もう、さっさと死んでしまいな。家の者に迷惑をかけねえようにな。

マチ子 (立上り、きつとなってキリストを見る。キリストは知らん振りをして正面を向いている) 諦めているのは、私自身のことではないわ。私に群がって、私を窒息させようとしている人たちのことよ。あなたがお作りになった諺、豚に真珠、あの豚のことよ。

キリスト (重々しく) ……われ己れに由りて語れるにあらず、われを遣わし給いし父自ら、わがいうべきこと語るべきことを命じ給いし故なり。

マチ子 (また口惜しそうにキリストを眺めるが、もとの殊勝な様子に戻って) けれど私は、あなた自身の心の底に、深く秘めて語らなかつた言葉をお訊きしたいのです。いかなる人をも審かず、誰をも赦し、何も求めずに与え、いわば己れを愛する者も己れを十字架にかける者も、すべてを同じように一つの眼で見ただあなた。その一つの眼について私はうかがいたいです。それは、この世のものではない美しい心でしようか。……いいえ、それはこの世のものではない冷酷な心なのは……。

キリスト ……それで? ……おまえさんの云いたいことはそれで終りか、

マチ子 いいえ。(自然な調子で) もう五年も以前のことだけれど、私は働きに出たことがあるの。働かな



くちやならない、朝から夜おそくまでからだの続く限り働かなくてはならないという思いに駆られて。  
キリスト 豚と一緒に暮らす決心をして。

マチ子 (内心のいらだたしさを隠して) 私はできるだけだけこき使われるために、女学校も途中でやめてしまったような履歴書を出して国立病院の事務所へ通うようになった。

キリスト けれど三日もたつと。

マチ子 一週間よ。(きつとなつてキリストを見る) ……けれど一週間もたつてから気がつくど、女の人も男の人も意地悪とも冷酷ともつかない、ラクダのような眼をして私を見ているじゃありませんか。

キリスト ラクダ……？

マチ子 私は自分の勤めていた病院の人たちを殆んど愛していた、私のそれまでの友達なんかよりずっとずっと好きだった。唯、私はあの人たちと、周りの人みんなと口をきかなかつただけ。用事以外の言葉を一切口にしないでまるで機械のように働いたのよ。それがあの人たちには気に入らなかつたの。……なぜ黙ってるの、なぜわたし達を軽蔑するの、一緒にいる女の人にそう問いつめられた時、私は思い出したわ、あなたのことを、イエス・キリストのことを。

キリスト 思い出したのは豚のことではなかつたのか。

マチ子 いいえあなたのことよ。その時私は、あなたがすべての人を愛することができるとは、すべての人間を軽蔑してるからだということがわかつたのよ。けれど、あなたのような強い意志を持っていなかつたわたしは、次の日から反対にこれ以上はできないと思われるほど愛想よく振舞つてみたんです。ところがどうでしょう。病院の人たちはなおさら私のことを変な眼で見るじゃありませんか。そうして私に一言も口をきいてはくれないんです。それこそ……

キリスト 豚だな、真珠を見向きもしない……

マチ子 (正面からキリストを見る) ……そうよ、豚よ。私はあなたのようなやり方でこの世の豚たちを愛したり軽蔑したりすることはできなかった。せいぜい自分で自分を軽蔑しないように気をつけながら、豚のことは諦めるほかはなかったんです。そうして、私は働くことを諦めて、この山の中の家へ戻ってきたんです。

キリスト ……宜しい。諦めなさるのは、いかにもおまえさんの勝手だ。しかしだな、わが子よ。おまえさんにひとことっておきたいことがある。

ピッコロ ……キリスト!

キリスト 豚が真珠に振向きもしねえってことは、あたりめえのことじゃあるめえか。おまえさんが何とおうと豚は豚だ。振り向こうが振り向くまいが、豚は豚なんだ。…俺は色んな豚とも仲良しなんだ。

(仲間の方をさして) 見ろ、あすこにも二匹、豚がいらあ。イカケ屋という豚、ピッコロという豚が…

…。(マチ子、きよとんとしている。キリスト、十字架にかけられた恰好をし、大声で二人をさして) あの二人が、俺の右と左で十字架にかけられる、強盗だ。

強盗だという言葉に、マチ子はハツとする。カオルはぴよこんと立上り、レイ子は、あわてて拍手を送る。

レイ子 (キリストに近づいて) すてきだったわ。…どうも皆さん、ありがとう。

ピッコロ 兄貴、冗談はもうやめようや。

キリスト 黙ってる、ピッコロ。俺がさっきいったことを忘れたか。今夜はもう金は要らねえ。もっと大切なもの、っていうやつを盗んでゆくんだ。せいぜい調子を高く合せておけ、ピッコロ。(娘たちに) さあ、今度は総出演と行こう。

カオル (ちよこちよここと出てきて) キリストさま、あなたはわかっておいででした。恋する者は幸いなりとは、いみじくも、おっしゃいませんでした。

キリスト あっはは……、笑わせやがらあ。幸いなる者がどこにいる？

ピッコロ そうだそうだ、俺のおふくろは俺が生れる時に誰もみてやる者がいなかったから、路の真中で死にしまったんだ。

カオル よくあなたは生き残ったのね。

イカケ屋 そうよ、こいつのおふくろが陣痛で苦しんでいる時に、運良く、通りかかったのがこの俺よ。母親は助からなかったが、こいつは俺のお蔭で陽の目をみたんだ。その頃札つきの不良だった俺を表彰したものがどうかって警察でもめたもんだがな。

ピッコロ どっちにしたって俺を泥棒に育て上げたんだから威張れることじゃねえな。

イカケ屋 馬鹿野郎！

カオル わたし達のお芝居より面白そう……、あなた方のお話。

キリスト 面白い？ ……もっともっと面白い話を聞かせてやろうか。俺たちがちょうど一年前に、やっぱり女ばかりの家に入った時にな。

レイ子 (かん高く) ごらんなさい、羚羊の首を。わたし達を見て笑っているわ。もうやめなければいけないわ。

キリスト 笑っているというなら、黙らせてやる。

キリスト、剝製に手をかけようとする、マチ子が金切声をあげる。驚いて振り向いたキリストにレイ子が近づく。

レイ子 (小声で) もうやめて。もう終りにしてちょうだい。

カオル キリストさん、話の続き、どうしたの？

イカケ屋 あっはは……。 (キリストに) キリストのキリストたる所以を一つ頼むぜ。 (レイ子に) この男はな……

レイ子 お願い、欲しい物を持って早く帰って。

イカケ屋 (しげしげとレイ子を見て) おまえさんには、火傷よりひでえ、ケロイドとかがあるっていったな。

レイ子 お芝居よ、もう終っ……

イカケ屋 (かぶせて) 顔じゃねえ、胸にあるとかいった。(何かいおうとするレイ子をさえぎって) 俺の女房は、ただの、唯の火傷だが、顔の、面つらのど真中から顎まるまる紫色のあざでふくれ上って、俺が兵隊からけえって見ると、やつは、早くいやあお化けだ。おまけに狂ってた。誰が憎いとも別れてくれともいわねえ代りに、俺を見ると泣き出して、三日三晩の間泣きやがった。こっちに通じる言葉なんてものは、ゆんべのことだよ、ゆんべのことだよ、それだけだ。ゆうべどうしたってんだって訊くと、よくもああ出ると思うほど、汚ねえ涙をひとかたまり、どっと眼からこぼしやがる……

カオル ひとかたまりの……

キリスト 女房の顔に火がついた、それでやつは、火のついたように泣くってわけだ。

イカケ屋 理屈はそれだけよ。それが理屈をいくらかみしめてみたところでどうにもならねえ。俺がそのとき、俺のお化け女房を一体どうしたと思う？ ……え、ケロイド・レースのお嬢さん。

ピッコロ (心配して小声で) 兄貴……

カオル 離縁してしまったの。

イカケ屋 ……(ゆっくりカオルを振り返り、首を振る)

カオル 殺したの？

イカケ屋 (ちよっとおどろく) ……え？

カオル お化けの奥さんを？

イカケ屋 やったよ。

カオル 誰にも見つからずに？

イカケ屋 ああ。

カオル やっぱり草刈りの鎌で……？

イカケ屋 どしゃ降りの雨の日だ。掘割りのどぶ泥の中に、俺はやつを……、あの時、あわてて駈け出して行く足音を聞いたんだが、あれは、ピッコロ、おまえじゃなかったのか。

ピッコロ そ、そうじゃねえよ。

イカケ屋 女房は死んだ、俺が殺した、そのことに変りはねえ。俺は手錠もかけられなきや、めそめそ悔みもしなかった。ところがどっちにしたって、女房は死んだんだ。俺が殺したんだ。それは、ずっとずっと

変りっこねえ一つの事だ。(少し照れて) 何だか、手めえのいってることがよくわからなくなってきやがった……

キリスト というのは、その辺が話の終りだったことよ。

イカケ屋 ほんとだ、それから先は、てんでお話にならねえ。なあ、ピッコロ。

ピッコロ 俺などは全くの初めっからお話にならねえ。(ちよっと興奮して) 俺なんか、生れた時からもう殺されちまったようなもんだ。

カオル 又殺す話？

ピッコロ (カオルに) 悪いか。

カオル いいえ、何度でも。

キリスト あっはは……

ピッコロ 大体俺が生れたのおふくろがくたばったのが一緒だったのがいけねえんだ。俺は時々いろんなことがいっぺんにわからなくなっちゃうことがあるんだが、そんな時は馬鹿みてえなこと考えるのも仕方がねえや。

キリスト その馬鹿みてえな考えってのを一つ頼まあ、ピッコロ。

ピッコロ (ちよっと深刻そうに) 一体俺がおふくろを殺したのか、それともおふくろが俺を殺したのか……

カオル 死んだのは、あなたのお母さんではないの？

ピッコロ そんなことあ、あたりきの話よ。今はな、芝居がかったことをいおうってんだからな。俺は、考えて見ると、自分が子供だったことがあると思っただことが一度もねえ。それに、今まで生きてみた感じに

よると、あの時、生れたのが俺で死んだのがおふくろだとは、どうしても簡単にそう思いこむわけにはゆかねえんだ。本当はあの雪の降る日に、あの材木置場の裏で生れ落ちた俺ってのは、本当は、星のちがうどこかでなぐり殺されて、それでこの世に出てきたのかも知れねえ。そうして俺が生れた時に死んだお袋は、反対にどこか素晴らしく綺麗な所へ生れかわったのかもしれない。生れた筈の俺ってえのは、実は、殺されてこの世に、死んだ筈のお袋はあの世に新しく生れ落ちた。そう思った方が、いろんな事がうなずけるんだ。それこそ何にも不思議はねえんだ。俺が四つの時から搔っ払いをやるうが、小学校へ行かせてもらったばかりに……

イカケ屋 金持の息子の片眼に指を突っこんで感化院に送られようが。

キリスト モーターボートを盗んで海賊の真似事をしようが。

ピッコロ あわや人間の心臓を一つくり抜きかかったりしたところで、誰にも文句をいわれる筋合いはねえ。俺が先ず一番に殺されてるんだからな。俺が何を盗もうと……

イカケ屋 誰を殺そうと。

キリスト 何と何と何をしよう。

ピッコロ 俺はもともと死人なんだ。いちいちお説教したり裁判所へ呼びつけたりする奴の方がフーテンだ。俺の二十二年の生涯に対して政府から感謝状を送られようが、俺は別に間抜け面はしねえ自信があらあ。

キリスト 調子に乗るな、ピッコロ。

ピッコロ 調子を高く合せとけっていったのは、

イカケ屋 高すぎらあ。

ピッコロ あたりきよ、俺はとにかくかん、高えんだ。俺は殺されたんだ、死んだんだ。生れたのはお袋だ。だからさ。そら……

キリスト わからなくなってきたか、その辺で。

ピッコロ いいや黙っててくれ。だんだんはつきりしてくらあ。……すべては、あの雪の降る日に、決まっていた……

キリスト おまえは四つの時から。

イカケ屋 俺は、十六の年に。

キリスト 俺はずっと遅く、ついおとしから。

イカケ屋

キリスト } どうしたってんだ。……あっはは……

ピッコロ

三人の泥棒、愉快そうに笑い合う。笑い終わってちよつとした沈黙が訪れた時、それまで隅の方に立ちすくみ、泥棒たちを見つめていたマチ子が、二、三步あゆみ寄って口を開く。

マチ子 どうしたことでしょう。……あなた方罪人つみびとに、わたしは今、とてもつたえられそうもない親しみを

感じている……

カオル わたしもよ、お姉さん……



泥棒たち、一斉に振り返る。

マチ子 あなた方は、確かに、生きてるわ。

カオル あなた方は、それこそ誘惑そのものよ。雪の降る日に、材木置場で生れたなんて……、ピッコロさま、わたしを盗んでちょうだい、わたしもあなたのように殺されたい。

マチ子 わたし達のための今夜の贈り物、それは三人の泥棒よ。わたし達を三つの麻の袋につめて、あなた方盗賊の国へ連れて行ってちょうだい。

キリスト (部屋を出て行くとうとするレイ子を引戻しながら) 彼らの中には、人の家に忍び入りて愚かなる女を虜にする者あり。かくせらるる女は、罪をつみ重ねてさまざまの欲にひかれ、常に学べども真理を知る知識に至ること能わず……

マチ子 何を学ぶというのでしょうか。何が真理だというのでしょうか。あなたは御存知の筈じゃありませんか。豚は豚だとおっしゃったじゃありませんか。

キリスト (にやりと笑って) ほほう、すると、おまえさん方も、豚か。

マチ子とカオル、自然に並んでキリストを見る。レイ子、ゆっくり顔を上げて姉たちを眺めると、二人はどちらともなく顔を見合い、そしてキリストの方を向いて、同時に深くうなづく。

キリスト あっはは……、盗んだぞ。とうとう盗んだぞ。あっはは…… (気持ちがいののように笑う)

イカケ屋 (マチ子とカオルの鼻先に近づいて) キリストを迷わせたな。

ピッコロ (キリストに) 兄貴……

イカケ屋 おい、キリスト!

ピッコロ 兄貴、おい!

キリスト 引揚げるか、イカケ屋。

イカケ屋 もう、か。なんにも盗まねえうちに。

キリスト、ギロチン窓に手をかける。ピッコロ、うなだれて従う。

マチ子 待って、キリスト!

カオル ピッコロさま、待ってちょうだい。

キリスト、ピッコロ、黙って振り向く。

マチ子 (希望にみちた声で) ……わたし達は三人、あなた方も三人。わたし達とあなた達、結婚することができるわ。

レイ子、ハツとして顔を上げる。三人の泥棒、マチ子を見つめる。

カオル (心から) いい考えだわ。……わたし達が三人、あなた方が三人……

イカケ屋 結婚……？

キリスト、また興奮したように二人に近づき、二人を通りこし、舞台前面に出てくる。そして振り返る。

キリスト 俺たちの国ではな、真昼間どこの女房がとび出して行こうが、どいつが夜中に女房を引っぱって来ようが、俺たち三人が金の代りに一人ずつ山ん中からぺらぺらした着物をきた女を連れて来ようが、それをまた二束三文にたたき売ろうが、そんなことはみんな赤犬が鼻つかぜを引いたほどにも気にしねえんだぞ。いいのをお嬢さん、ほんとに連れて行くぞ。そうして泥んこの横丁で盗んできた薪でめしを炊かしてやるぞ。

カオル (呟き) すばらしいわ、あなたの言葉。……すうっとする。

キリスト (業をにやして) いいか、よく聞けよ。おまえさん達がどんな御大層な決心をしたって、俺たちにや、

マチ子 (落ちついて) わたし達には、一人の父があります。本当の父親、たった一人しかいない父親です。けれど今では、わたし達を膝に抱き上げ、わたし達を順々にブランコに乗せ、わたし達に一つずつビスケットを分けてくれた、昔の彼ではありません。今では唯、三カ月に一度、ハトロンの袋に入ったお金を屈けてくれる、一人の老人に過ぎないのです。それも、間もなく持って来なくなるでしょう。そうして彼は、いつかは殺されるか自殺する、それが私には感じられるのです。その日までわたし達はこの家に居ることはできないと、わたしは考えていました。今日こそ、わたし達が行く日です。父が減じる前

に、あなた方盗賊の国に生れかわる日です。……イカケ屋さま、キリストさま、ピッコロさま。わたし達を連れてこの山を下りなければなりません。それがあなた方の運命なのです。そうされるのがわたし達の宿命なのです。……出発は明日<sup>あした</sup>、夜明けと共に。今夜はこのかりそめの宿にどうぞおやすみ下さい。

泥棒たち、ポカンとして立っている。

マチ子 さあ、この住みなれた山も、腐りかけた別荘も、今宵かぎり。……カオル。

カオル お姉さん……

マチ子 レイ子。

レイ子 ……(黙って顔を上げる)

マチ子 (窓をさして) ごらんなさい。街の方へ、泥棒たちの国へ、とき色の星が流れて行くわ……

三人の泥棒、互いに顔を見合せ、カオルとレイ子は、マチ子を注視する。

幕

### 第三幕

第二幕の直後。

三人の泥棒とカオルとマチ子がひとかたまりになり、レイ子は一人だけ離れて立っている。中央のテーブルに一組のカードが並べられ、マチ子とカオルが、その中から六枚の札を抜きとる。

カオル わたし達がクイーン。

マチ子 あなた方がジャック。

カオル 不吉なスペードは抜いて、ハートとクラブとダイヤ。

マチ子 同じマークを取った者同志が結婚の契約を結ぶ……

カオル おわかりになった？ これがあなた達のカード。

マチ子 外で一枚ずつ分けるのよ。……さあ、レイ子、いらっしやい。

カオル 順番を決めなきゃ、お姉さん。

マチ子 そうそう……最初が、ダイヤ、その次がハート。

カオル 最後がクラブね。

マチ子 いいわね、あなた方はそちらの廊下に出て、今いった順に入って来ててください。

イカケ屋 最初がダイヤだな。

マチ子 ええ。次がハート。

カオル 最後がクラブですわ。

マチ子とカオル、部屋を出る。レイ子も仕方なさそうに出て行く。三人の泥棒、互いに顔を見合わせながら下手の扉に消える。

——舞台空白——

しばらくしてカオルが入ってきて部屋を横切り、下手の扉をあける。

カオル　ダイヤの方、どうぞ。（すぐ首をひっこめてまた上手へ退場）

下手からイカケ屋、上手から、マチ子が出てくる。

マチ子　あなたでしたのね。

イカケ屋　不服か。

マチ子　いいえ、別に。カードをどうぞ。

イカケ屋、ダイヤのジャックをマチ子に渡す。マチ子はその上に自分のカードを重ね、イカケ屋につきつける。

マチ子　わたしは、これ。間違いありませんね。

イカケ屋　うむ。（ソファにかける）

マチ子 わたしの心は、もう決まっています。あなた方が、いや今は、あなたが問題なんです。もしおいやだったら、このカードを二つに破ってすぐ出て行って結構ですわ。(ジャックをイカケ屋に渡す)

イカケ屋 おまえさんは、本当に俺たちのところへ来る気か?……(二人、じっと見つめ合う)正気か、とは訊かねえ。俺はどっちだっていい。唯な、俺が一旦承知したあとでそっちがいやだといっても、その時俺がどうするかわかってるのか?

マチ子 (呟き)……その時は、今度は本当に袋かトランクにつめこまれて……

イカケ屋 連れて行かれてもいいのか。

マチ子 たった今でも。(色っぽく身をよじって)泥棒の奥さんになると、苦勞が多いでしょうね。

イカケ屋 俺が送られたら、どうやって食ってゆけばいいか、知ってるか。

マチ子 送られたら?

イカケ屋 捕まって、刑務所行きになった時のことさ。

マチ子 その時は、あなたに代って泥棒をやればいい……。

イカケ屋 あっはは……。あなたに代ってか。……せつかくだが、駄目だよ。俺の商売はしじみ屋たあ違うんだ。

マチ子 それじゃあ……、

イカケ屋 (ずばりと)淫売になるんだ。

マチ子 (息を吞んで)え……。そういうことに、決まっていますの。

イカケ屋 決まってる。泥棒の女房は誰でもそうだ。もし違ったことをすりゃ、かえって変な目で見られらあ。

マチ子 それでは貞操というものが……

イカケ屋 そいつのために淫売になるんだよ。俺が入ってる間は、俺は自分の女房を自分のものにしておくわけにゆかねえ。それといって、誰に渡すわけにもゆかねえ。女房が淫売になってりゃ、食ってゆける上に、こっちは一番落ちつけるって寸法さ。

マチ子 そんなものでしょうかしら。

イカケ屋 あっはは……。……なんだい、元気がねえな。やっぱり泥棒の女房には……

マチ子 (強く) いいえ。……(細い声で) わたしは今、考えているんです。

イカケ屋 やめようか、どうしようか？

マチ子 いいえ、迷っちゃいないわ。……(間) 分ってもらえるかしら。わたしは、あなたのところへ行く資格があるわ。わたしは淫売婦にもなれる……

イカケ屋 (少し業をにやして) 俺がわかるかどうか、そんなこたあ問題じゃねえんだ。泥棒の女房になるのに資格が要ってたまるか。余計なことはいわねえで、俺が来たっていったらついてくればいいんだ。

マチ子 (弱々しく) あなたは、まだ何ともいってないじゃありませんか。

イカケ屋 うむ……？

マチ子 (ソファに深々とたれて) わたしは、疲れてるの。これまでに一度も、眠ったことがないような気がするの。瞬きさえもしないで、自分のすぐ後ろにいる何かのためにしょっちゅう小突かれている感じ……、一日生きるのに一日、一年生きるのに一年の寿命をわたしは縮めているのかも知れない。

イカケ屋、マチ子の背後でカードを破ろうとする手つき。



マチ子 でもねえ、わたしがあなたのところへ行こうとするのは、そんなこととは関係がないの。あなたと二人で、という考えがわたしを惹きつけるの。

イカケ屋、カードを破るのをやめ、ちよつとにやけた表情。

マチ子 夜、あなたがどこかへ泥棒にいついて、わたしが一人で寝ている時、わたしは生き生きした不安を感じることができるだろう、もしあなたが送られたら、わたしは自然に淫売婦になれるだろう。朝起きた時にいい天気だったら、先濯物のことを考えるだろう……そんな風な期待が、わたしをあなたのところへ行かせるんです。

イカケ屋 そんな……

マチ子 ……わたしはダイヤのクイーンを選んだ、あなたはダイヤのジャックだった。わたしがあなたのところへ行こうと決めたのは、わたし自身ではなくて、ダイヤのカード。そのことをあなたは何とも思っていないでしょうね。ピッコロさんでもキリストさんでもよかったのに、あなたと結婚しようとするのを、あなたは別に気にはしていないでしょう。あなたさえ承知だったら、わたしを連れて行くでしょう。わたしは思い描いていた恋人でなしに、そういう人を選んだんです。そして泥棒の女房になろうといってるんです。……あなたと二人、というわたしの考え、軽蔑するかしら。

イカケ屋、真剣な顔でマチ子を見つめる。

マチ子 (立上ってイカケ屋に背を向けながら) わたしは、決して箱入り娘なんかではないのよ。御飯も炊くし、洗濯もする。欲しくても買えない着物だって沢山あったわ。けれど、それが買えないから買ってもらえないからといって、悲しく思うようなことがなかっただけなの。雨の降る日に天気が悪いといって癩を起すようなことがなかったの。地震も火事もこわくはなかったの。(振り向いて) そういうことが、あなたのところへ行ったら、みんな変ると思うのよ。きっと変るわ……。

イカケ屋、マチ子に近づくが、あまり接近せず、ちよつと思いつめた風。

イカケ屋 (ぎこちなく) おまえさんを、女房にしたい。けれど、俺が送られても、おまえさんは女がちがうから、俺がいなくとも、家にいて……、淫売なんかにならなくとも……

マチ子 (微笑して) でも、しきたりなんでしよう。

イカケ屋 いや、そういうわけじゃあ……

マチ子 どうやってたべてゆくのか。

イカケ屋 俺は、貯金する。博奕をやめる。そうすりや留守の間……

マチ子 ほほ……。ありがとう。

イカケ屋、マチ子に近づき、ドレスの隙間からカードを彼女の胸に落とす。そしてそそくさと部屋を出て行く。

マチ子はソファにかけドレスの上から胸の中のカードをおさえてみるが、すぐ立上り放心したように上手の扉から出て行く。

マチ子が出たあと、入れ代りにカオルが入ってきてテーブルの傍に立ち、下手の扉をじっと見つめる。……ピッコロがカードを掴んで入ってくる。

カオル お待ちしていましたわ、あなたを。

ピッコロ へ……（すっとぼけた表情）

カオル どうぞおかけになって。（ピッコロ、カオルを見つめながらソファにかける）ハートのジャックは、きつとあなただろうと思っていたの。

カオルがテーブルの上にカードを置くと、ピッコロもその隣りに並べる。

カオル ピッコロさま……

ピッコロ （身をずらして）ちよ、ちょっと待ってくれ。……眼を見せてくれ。

カオル わたしの眼？

ピッコロ うん。

カオル （にっこり笑って）どうぞ。

ピッコロ、じっとカオルの瞳を見つめ、しばらくして離れる。

ピッコロ 瞬きは、するな。

カオル あなたはなさらなかったわね。

ピッコロ え？ ……（何か不安そうに部屋を見廻し、立上って歩く）例えば、な。ええと……（考えこむ）面倒くせえ、おまえさんは、誰だ？

カオル 三神家の二番目の娘、三神カオル。

ピッコロ ふん、ジャンヌ・ダルクじゃねえな。

カオル マリー・アントワネットでもないわ。

ピッコロ ……もう一つ、時々、ひがん花の、ガーベラでもいい、あの赤い花びらを食べてみたい気にならねえか。

カオル ならないわ。

ピッコロ うむ……（何か思い出そうとする）

カオル もうおしまい？ そのくらい質問じゃまだわたしが気ちがい気ちがいかわからないでしょう。（ピッコロ、びっくりして振り返る）わたしがもし気ちがいだとしたらあなただってそうでしょう。だから、どうでもいいことじゃない？

ピッコロ、複雑な表情。しばらく立ちつくす。

ピッコロ （急にカオルに近づき、顔をくっつけて）……俺たちは、本当の泥棒なんだぞ。

カオル、ちよっとピッコロを見つめたのち、黙って頷く。ピッコロは彼女から離れ、扉の外をうかがったり、何かをあわただしく考えたりしてからやっとソファに落ちつく。

ピッコロ 俺はな、足を洗おうと思ってるんだ。

カオル というのは、泥棒をやめるってこと？

ピッコロ しいっ。……(カオルの顔をのぞきこみ)カオル、といったな、おまえ……

カオル ええ。

ピッコロ 俺は、良太郎、山下良太郎っていうんだ。

カオル ピッコロの方がいいわ。カオル、ピッコロ。カオル、ピッコロ。ピッコロ、カオル。ピッコロ、カオル、あっはは……

ピッコロ ……子供の頃を思い出すよ。

カオル 子供の頃からピッコロ？

ピッコロ いや、盲目の女乞食の子にカオルってえのがいて、俺と割合、仲が良かったんだ。

カオル まあ……、その女の子、小さい時の、あたしだったかも知れないわね。

ピッコロ え……？

カオル あなたはその子を、妹のように、カオルカオルって呼んでいたのでしょうか。

ピッコロ うむ……

カオル 小さなピッコロ、それから女乞食の女の子。……わたし、眼の前に浮かべることができるわ。……

あなたが九つ、カオルが七つ、二人の遊び場は、あなたが生れた材木置場からちょっと離れたところにある、露草のいっぱい生えた空地なの。そこにあなた達がいると、ほかの子供は寄りつかない。ほかの子供が遊んでいると、あなたがみんなを追い散らして隠れているカオルを大声で呼ぶ、するとカオルはダブダブのスカートを両手でたくし上げながら出てくるの。

ピッコロ (感嘆して) まるで、見ていたようだ……。俺は、あのカオルが、トラックに……。 (ハッと氣を取直したように、カオルを見て) おまえは……

カオル カオル。

ピッコロ そりゃそうだが、あの乞食の子のカオルだと、本気で思ってるわけじゃねえだろうな。

カオル あっはは……

ピッコロ そうすりゃ、あのびっこになったカオルが一体……。俺を、変な氣持にさせねえでくれ。

カオル、笑い止み、立上ってカードを取上げ、ピッコロに見せる。

カオル このカードの絵を見てごらんなさい。

ピッコロ、真面目くさってカードを見る。

カオル 今度はひっくり返して。……。どう? どちらの顔も同じでしょう。持っている花も、衣裳の模様も。けれどクイーンの顔は二つあって、一人じゃない、だからやっぱ違う。

ピッコロ、奇妙な叫び声をあげて立上る。

ピッコロ 俺をからかう気か。俺を着に一杯飲もうってのか。……おい、おんない！

カオル まあすばらしい。わたしは、おんなね。

ピッコロ (更に怒りにかられて) なに……、この、すべた。

カオル すべたっていうのは売女よりはいいの？

ピッコロ やめろ！……(どもりながら)俺は、いい事をした覚えはねえが、泥棒より悪いこともしなかった。しかしな、人殺しだって出来るんだぞ。

カオル それごらんさない。足を洗うどころか、その手に血を塗ろうっていうのね。

ピッコロ (ちよっと気を抜かれるが虚勢を崩さずに) その血が、おまえの血でもいいのか。自分の咽喉笛から流れる血を、おまえは笑って見ていられるか。

カオル お芝居の続きではないのよ、ピッコロさま。あなたの持っているナイフがどんなによく切れるからといって、ポケットに入れたままわたしの血を流すことはできないでしょう。あなたは、泥棒をやめられない。けれどまだ人殺しにはなれないっていうことがわたしにはわかるのよ。(ピッコロに近づいて) わたし達は、今事務的な話をしている筈よ。そうでしょう、結婚について、これからの生活について……

ピッコロ (全く気を抜かれて) ……だから俺は、最初から切り出したじゃねえか。足を洗うってことを……  
……そうしたら……

カオル 足を洗ったり手を汚したりなんてことは、どうでもいいの。あたしという女、あなたという男の間

題なの。

ピッコロ 女と男……？ さっぱり事務的じゃねえな。

カオル 冗談は止めて振り出しに戻りましょう。

ピッコロ 冗談？ ……じゃねえや。

カオル ピッコロさま、わたしは、あなたをお待ちしていたんです。太陽は勿論、月の光りも星の光りもないこの部屋で、花の匂いも音楽もない、人声も聞えないこの部屋で、そうしてわたし自身の若さにも目をつぶって、わたしに愛を誓ってください。

ピッコロ ちょっと待った。……おまえさんこそ芝居がかりじゃねえか。それが事務的な話というのか。

カオル (うなずいて) ……わたしにとっては。

ピッコロ ……よし、調子を合わせてやろう。堅気になる相談はひっこめて、もっと大事な、愛についての問題だ。

カオル そう、愛について。……考えてもどうにもならないように思えるけれど、結局は誰もが考えずにはいられない、愛について……。

ピッコロ わかったよ。

ピッコロ、元気よく立上ってカオルに近づき、乱暴に彼女のドレスをひっぱる。胸のところが破れ、カオルの乳房が少しのぞく。カオル、じっとピッコロを見つめるが、次の瞬間、ピッコロは彼女を長椅子に押倒し、接吻する。



ピッコロ (起き上って) 事務的な手続きは、終わったぜ。

カオルは仰向けになったままピッコロを見ている。ピッコロ、手を差出してカオルの手を握り、彼女の半身を起してやるが、そのまま黙って出て行く。カオルは、しばらくは乱れたドレスを直そうともせず戸口を見つめている。そこへキリストが入ってきて彼女を認め、立止る。カオルはやっと立上り部屋を出て行く。

キリストがテーブルに近づいた時、レイ子が入ってくる。そして大股に彼のところへ歩み寄る。

レイ子 (鋭く) 姉さんに乱暴したのは、あなた？

キリスト (カードを見せて) 今の相手はピッコロさ。

レイ子 (キリストから離れながら) でも、結局は、あなたよ。……わたしがやめてちょうだいって頼んだ時に、聞き入れてくれなかったあなたが一番悪い。

キリスト 悪い？ ……もつと悪かった筈なんだぜ、俺たちは。

レイ子 (振り返って) 姉たちは、病気だっただけでしょう。

キリスト そいつあみんないってたな。おまえさんだっただけ(頭をさして) いけないことになってるんだからな。

レイ子 見境いが見つからないの。

キリスト 今のところな。

レイ子、絶望したように腰を下す。

レイ子 姉たちは、まるで嵐に打たれたようにぐったりしているわ。わたしが何を訊いても返事をしないで……。

キリスト ほほう、面白い。全く同じじゃねえか。

レイ子 何が？

キリスト イカケ屋もピッコロも、底なしに抜けた面をして、黙りこくってらあ。

レイ子 まあ……それじゃあ、

キリスト 承知したんだろうな、あの二人は。

レイ子 (強く) 結婚しようなんてこと、どうして本気でできるの？

キリスト 本気でいっていたからだろう。

レイ子 でも……

キリスト (強く) 俺たちは正直なんだ。最初から本気なんだ。

レイ子 ……

キリスト (口調を変え) さっきから気になってしょうがねえんだが、あの風船は、一体どうしてあんなところに置いてあるんだ。

レイ子 (どきっとするが、それを隠して) 別に……、あなた方にとっては、何の意味もないんです。

キリスト 羚羊同様にか。

レイ子 わたしの気紛れの一つですわ。

キリスト おまえさんの？

レイ子 ええ。

キリスト おまえさん、幾つになる？

レイ子 どうして年なんか訊くの。

キリスト どうして？ ……それじゃ訊くが、俺がただ幾つかって訊いてるのに、おまえさんは、どうして年を訊くのかって、どうして俺に訊くんた。

レイ子 ……二十三よ。

キリスト 初めっからいえばいいだろう。……二十三、実のところは十六だろうが二十五だろうが、構やしねえんだ。幾つだい、二十三。それでいいじゃねえか。

レイ子 それではわたしも訊くけど、あんたは、泥棒でしょう。

キリスト そうだ。

レイ子 お金を盗みに来たんでしよう。

キリスト そうだ。

レイ子 盗みさえうまくいけばいいんでしよう。

キリスト そうだ。

レイ子 じゃ、なぜいつまでも愚図愚図してるの。

キリスト 俺たちの仕事は、事務的には運ばねえ。人間的なんだ。そうだな、例えば、芸術家の仕事に似たところがある。

レイ子 (思わず吹き出して) うふ……

キリスト (真面目に) 笑えるのか、おまえさんは。俺が親切におもんばかるところによれば、おまえさん達姉妹にとっちゃあ、今夜は、並みな夜じゃあねえぜ。

レイ子 …… (かすかに恐怖の表情)

キリスト 俺たちなんてものは、ほんとに豚みてえなもんだ。食べる物は何でも食うし、食えねえものは直ぐ吐き出しちまう。あの二匹の豚のやつ、何だかわからねえものを一つずつ、どうやら口にくわえたらしいが、とても固くて食いきれねえと思ったら、明日にでもゴミのために捨てるだろう、豚って奴は気軽なものなんだ。

レイ子 あなたは、どうするの。

キリスト (間——何か苦しげな表情) ……

レイ子 どうするの？

キリスト 脅迫されてるようだが、反対に。(何か気がついたように) おまえさんは大体、俺たちと一緒について来る気なんぞ、これっぽっちもないんじゃないかねえのか。

レイ子 (キリストの顔をじっと見つめる) ……

キリスト 何を見てる！

レイ子 あなた方の気軽さというものが、わたしにはわかる。

キリスト それで？

レイ子 わたしも、もう少しで気軽になれる。

キリスト まだ、なれてはいないんだな。

レイ子 もう少し。

キリスト いつまで待てばいいんだ。

レイ子 それが返事？ 連れて行くの？ やっぱり。

キリスト 仮に訊いてるんだ。

レイ子 あなたから先に。

キリスト おまえさんだ。

レイ子 わたしにはきめる力がないんじゃないの？ 泥棒たちの自由よ。

キリスト 泥棒には、自由なんてものはねえんだよ。

レイ子 自由を奪うことはできるでしょう。

キリスト ……おまえさんは一体……

レイ子 あなたこそ……

イカケ屋とピッコロがばたばたと入ってくる。

イカケ屋 カードを貸してくれ。何だか気が滅入っていきねえんだ。

キリスト 全部揃ってはいねえぜ。

イカケ屋 かまわねえ。オイ、チヨをやるんだ。

カードを受けとって、二人はすぐ出て行こうとする。

キリスト　ここでやれよ。

イカケ屋　……いいのか？

キリスト　ああ。

ピッコロ　じゃ、この方がいいな、兄貴。

イカケ屋、レイ子を気にしながらも、扉を閉める。二人は隅にあぐらをかいて勝負を始める。

キリスト　（二人の方を見ているレイ子に）おまえさんには、俺たち三人一緒の方がいいんだろう。

レイ子　……あなたは、すぐ俺たちとおっしゃるけど、今は私とあなたの時間なのよ。

キリスト　まだまだだな、気軽になれるのは。……そんなことを気にしてるようでは、ってえことさ。二人

の姉さん方がたの方がさっぱりしてらあ。カードで相手を決めるなんていい度胸だ。

レイ子　（ちよっと興奮して）姉たちは違います。なぜわからないの。病気よ、駄目なのよすべて。何にもないのよ。

キリスト　（強く）病気病気っていうな。なぜわからないの……こっちがいつてるんだ。あの二人が病気ならおまえさんも病気なんだ。あの二人が気がいいなら、おまえさんも気がいいだ。

レイ子、憤然と立上る。

キリスト　（イカケ屋たちの方を見て）あの二人が豚なら、俺もそうだ。だから俺たちって、俺はいう……

ピッコロ ニ三四おかぎのカブ……悪いな。

イカケ屋 ふん、さっきから豚が続きやがる。

レイ子 イカケ屋さん。

キリスト あっはは……、気にしなさんな。今のは違う。三枚の札の数を足して、端数がゼロになるのを豚という……、一番弱えんだ。

ピッコロ ふふん、九になるのがカブで、一番強い。

キリスト 黙ってる。

レイ子 (感情を一生懸命抑えて) あなた達は……

キリスト ほら、あなた達とくる。だから……

上手の扉からマチ子とカオルが、わめきながら互いにもつれ合って飛びこんでくる。

マチ子 うちの塩を盗むなんて……、亭主が刑務所に入ってるからって、馬鹿にすると承知しないよ。

カオル あんたの方が下品じゃないか。あたしが浮気してるって、どこの誰の……

マチ子 台所へとかく来るんだ。塩ばかりじゃないよ、菜っ葉だって……

カオル 一体全体、

マチ子 早くくるんだよ。

カオル (泣き出しながら) 口惜しい……。

マチ子 口惜しいのはあたしの方だよ。

二人は下手の扉へ消える。

浮き足立ったイカケ屋とピッコロがそのあとを追って去る。

レイ子は、彼らが坐っていたところへ蹲まる。

レイ子 あの二人の姉は、あした病院へ行くことになってるんです。

キリスト 病院へ？

レイ子 ええ。朝、九時に、迎えの自動車がやってきます。

この時、イカケ屋とピッコロが戻ってくる。

キリスト 聞いたか。

イカケ屋 車が？

キリスト 病院からのお迎えだそうさ。

ピッコロ 明日の朝……

イカケ屋 病院ってのは……

キリスト 肺病の療養所でも産婦人科でもねえ、勿論な。

イカケ屋 ふーん。

キリスト どうするんだ、イカケ屋、ピッコロ。



ピッコロ 兄貴は？  
キリスト 俺か……

カオルとマチ子が戻ってくる。狂乱の様子はなく、取澄ましている。

マチ子 もう、全部契約はお済みになりましたの。

カオル 何だか、静かねえ。

イカケ屋 あっはは……

キリスト 何がおかしい。

イカケ屋 ……分らねえ。

カオル ああ、今のわたし達のことね。ちょっと未来を生活していたの。

マチ子 レイ子さん、済んだの。

レイ子 (曖昧に) いいえ、まだなの。

マチ子 だって、みんな……

レイ子 今お姉さんたちが。

マチ子 うふ……、そう、ごめんなさい。カオル、行きましょう。

カオル ピッコロさん、こっちへいらっしやい。イカケ屋さんも。

カオルとマチ子出て行く。イカケ屋とピッコロは顔を見合わせてためらっている。

キリスト 行けよ。

二人、のろのろと上手から出て行く。

キリスト (ソファに深く坐って) ……すると、おまえさんがたった一人、ここへ残るわけだな。

レイ子 あなたがわたしを残して行けば。

キリスト 俺は、残して行く。

レイ子 返事をしたわね、やっと。わたしが行かないと思って？ それとも、歯に合わないから？

キリスト からむな、おまえさんは。

レイ子 うふ……。(「ブラック・ヒル・ダコタ」を低く口ずさみながら、浮き浮きしたような、また興奮を隠すような風に歩き廻る) ……ねえ、キリストさん。もし姉たちが病気でなくて、わたしが自由だった

ら、わたし一人出て行くことになってたかも知れないわ。あなた方にとって、わたしだけが気がいじみた女になっていたかも知れないわ。

キリスト (皮肉に) 気がいの姉妹を持ったことは、幸福だったな。自由になれなくて、まずよかった。

レイ子 (キリストの言葉を無視して) けれどわたしは、明日からこの家で一人になる。姉二人が病院へ入るにしても泥棒たちの国へ連れて行かれるにしても、わたしはここへ一人で残る。もうお芝居もやらない、食事も一人分だけ、朝起きた時に不機嫌でも鏡を見れば自然に笑ってしまう。泣いても笑っても、すべてがおかしい……。一人では、誰もいなければ、すべて滑稽……。

キリスト　すべてが美しい、だろう？　お嬢さん。

レイ子　わたしを連れて行かない泥棒は黙っていて。

キリスト　俺が連れて行くのを、希んでいるのか。

レイ子　……気軽になれたらねえ、もう少し。それに、あなたも本当は、あんまり気軽ではないらしい。

キリスト　いいや、俺は気軽すぎるんだ、少し。つい親切気を起す……。

レイ子　あなたが親切？　……どうして？

瞬間の沈黙ののちイカケ屋とピッコロがふらふらと入ってくる。二人は身振りでも駄目だという風な様子をキリストに示し、そのまま下手の方へ行く。

キリスト　どこへ行くんだ。

ピッコロ　水を飲みに。

イカケ屋　俺はうがいだ。……（戻って、レイ子に）おまえさん達の兄貴というのは、ここで首をくくったのか？

レイ子　……わたし達には、最初から兄さんなどいません。

イカケ屋、不可解な表情でピッコロと共に去る。

キリスト　話は、終わったな。

レイ子 終わったわね。……今夜のうちか、明日の朝早く、ここを発ってください。三人一緒に。お金は用意しておきます。

キリスト 金は、要らない。

レイ子 それが親切？

キリスト 違う。……別だ。

レイ子 それでは御自由に。でも、何か記念品を……

キリスト あの、風船でも貰って行こうか。

レイ子 風船？

キリスト 羚羊はちよつと外せそうもねえし。

レイ子 あなた達も……

キリスト 泥棒に何か置いて行けっていうのか。

レイ子 何か珍しい物を持っているような気がするの。

キリスト 俺たちがか？……（何か気がついたように）ふん、もう終わったんだぜ、話は。どこかおまえさん

には、なぜか分らねえが、未練といった風なものがある。

レイ子、ちよつとキリストを見つめるが、すぐに上手の扉へ行く。キリストも彼女に背を向け、下手の扉へ行く。そしてレイ子が扉をあけるとマチ子とカオルが入ってきて彼女と向い合い、キリストが下手の扉をあけると、イカケ屋とピッコロの二人に顔を合わせる。

キリストとレイ子互いに振り返る。舞台の両側の娘たちと泥棒たちの間に不気味な沈黙。

レイ子 (テーブルにかけ寄りながら) さあ、乾杯しましょう。わたし達の宿命の夜のために!

誰も黙っているが、キリストが先ず近寄り、イカケ屋とピツコロもテーブルに近づく。しかし上手からやってきたマチ子とカオルが二人をさえぎるように立ちはだかり、それぞれ彼らを見知らぬ人間のようにはじめ、すうっと通りすぎて下手の扉へ消える。

レイ子がハツとして姉のあとを追い、部屋を出て行く。……すぐにカオルとマチ子の気ちがいじみた笑い声が聞える。

扉がひらき、レイ子が戻ってくるが、扉にもたれて、うなだれる。泥棒たちは、レイ子を眺め、狂女たちの笑い声を聞いて茫然……。

—幕—

## 第四幕

翌る朝。

部屋の中は三幕までと打って変わった明るい光線にみちているが、壁の崩れかけや隅々の乱雑さはつきり目立ち、夜よりも陰惨な印象がある。

衣裳と髪型を変えたレイ子が窓によって外を眺めている。

上手からマチ子が入ってくる。同じドレスだが、髪を長く垂らしている。

マチ子 (上機嫌に) お早う、レイ子さん。(下手へ行きながら) あなたはもう朝御飯すんだの。

レイ子 ええ。……ミルクのコップを割ってしまったからコーヒー茶碗で飲んでね。

マチ子 (出ながら) 瓶のまま飲むわ。

レイ子、ちよつとマチ子の出たあとを見送っているが、また外を眺める。

静かに扉が開き、カオルが足音もたてずにレイ子に近づく。素足。彼女はマチ子と正反対に打ちしおれた風である。

カオル (気味悪い声で) いい、天気ね。

レイ子、びっくりして振り返る。

カオル けれど、あんまり静か……。山が噴くのかも知れない。

レイ子 朝御飯、できてるわよ。

カオル たべたくない。(ふらふらと下手へ行きながら)……。ピッコロさま、お目覚めになって。(出て行く)

レイ子もカオルのあとから出て行こうとするが、考えこみながら戻ってくる。  
カオルが戻ってくる。

カオル どこにいるの、ピッコロは……。頭が痛い。……。探さなくちゃ。

レイ子 どこにもいないわ。

レイ子の言葉をきかず、カオルは窓から身をのり出したり暖炉の中や長椅子の下を覗く。

カオル どこにもいないじゃないの。どこに隠れているの、ピッコロは。(烈しい頭痛に悲鳴を上げて)あ  
あ、頭が……。早く来て、どこにいるの。

レイ子 (近寄って優しく) お薬を飲んで、もう少し寝ていた方がよくない？

カオル (初めてレイ子を見て) あんたが、ピッコロを追い出したの。

レイ子 あの人には泥棒の仲間なの。ゆうべは恐ろしかったけれど、もう終わったのよ。

カオル 終わった？ 何をいつてるの。これから始まろうとしているのに。わたし達は今朝新しい街へ出発する約束がしてあるのよ。

レイ子 それは、いつものカオル姉さんの、夢なのよ。ピッコロは唯の泥棒なの。お金をやったらすぐ帰って行ったわ、仲間と一緒に。

カオル おだまり、何のためにわたしを欺そうとするの。あんたにだって、キリストという恋人がいるんじゃないか。もしかしたら、あんたはキリストでなしにピッコロが好きになったんだね。それで、先に打合せをして帰ってしまったって、どこかの森の中で逢いびきをしようというんだね。……いつてごらん、どこであなた達二人は待ち合わせるの。

レイ子 (当惑して) わたしがそんな……。三人はね、みんな、早くすっかり忘れてしまいたいような、下等な泥棒たちなのよ、お姉さん。

カオル (少し冷静になって) 泥棒だってことは、知っています。(下手へ行きながら) そんなことは問題にならない。上等な泥棒だからと思って婚約したわけでもないわ……

カオル、出て行く。レイ子も上手から出ようとするが、自動車のクラクションが聞え、窓際へとんで行く。車は走り去り、また出ようとする、戻ってきたカオルに呼びとめられる。

カオル レイ子さん。……何ていつて三人を追い帰したの。

下手からマチ子が心配そうに入ってくる。



カオル 病気だから、っていったの？

マチ子 ……カオル。(近づいて) あの人達はね。

カオル (マチ子の手をすりぬけ、長椅子の方へ行きながら) ……今頃はピッコロさん、どこでどうして…  
…

マチ子 あの三人は泥棒などとは違うのよ。

カオル (坐りながら) あんな風に男の人に抱かれたことは…

マチ子 ゆうべはちょっと変わったお芝居をやっただけなのよ。

カオル (堪えかねて) ピッコロさん。

マチ子 (肩をゆすぶって) カオル。しっかりおし。もう朝なんだよ。

カオル あの人にはもう少しで信じてくれるところだった。わたしが女乞食の子のカオルだってことを。

マチ子 (レイ子に近づいて) やっぱり男の相手役など、呼ばない方がよかったねえ。

レイ子、うつむいてしまう。

カオル 女乞食のカオルだってことを…

マチ子 (カオルを見ながら) 今までになく悪いわ。(レイ子に) 入院させなくちゃいけないかしら…

レイ子、じっとマチ子を見つめる、そして身をそらして上手から出て行ってしまう。

マチ子 レイ子。

マチ子、レイ子の奇妙な態度に、ぼんやりしているが、カオルの声にまた我にかえる。

カオル もういや、もうここにいるのはいや。なぜ行ってしまったの、なぜわたしを置いて行ったの、ピッコロさん。

マチ子 (カオルと並んで) ねえ、カオル。あんたは頭がいい筈じゃないの。ゆうべの三人はレイ子が招んだ……

カオル カオル、ピッコロ。カオル、ピッコロ……

マチ子 落ちついてちょうだい。黙るのよ。黙って静かに考えるのよ。わたし達は誰にも生活を乱されてはいけないわ。これまで我慢してきたように、これからも苦しみに堪えて行きましょう。ね、カオル。……  
(この言葉の間も、カオル、ピッコロ、というカオルのセリフが続いている)

カオル ……カオル、ピッコロ。……行ってしまったのねえ。……もう泥棒たちは……

レイ子が戻ってきて戸口で二人を見つめる。

マチ子 泥棒じゃないの。村の人達だったのよ。

カオル 泥棒たちは……

マチ子 村の人達よ。

カオル 明日になるともうわたし達を忘れてしまおうでしょう。わたし達の顔も声も、わたし達が何人いたかということも、みんな、みんな……

カオルとマチ子、同時にレイ子に気がつき、彼女の方を向く。レイ子はまた出て行こうとするが呼びとめられる。

マチ子

レイ子。

マチ子 (立上って) すべて、あなたの罪よ。

カオル なぜ三人を追い払ったの。

マチ子 (レイ子に近づき小声で) どうしてゆうべはあんな人達を招んだの。カオルを……

カオル あの人達を返してちょうだい。今すぐに呼びに行つてちょうだい。(烈しく身もだえして) ああ、

頭が、頭が割れる……(うつ伏せになる)

マチ子 こわいわ。……わたし、電話をかけてくる。(出て行く)

カオル (半身を起して) かわいいピッコロ……(元氣なく) 返してちょうだい。

レイ子 (近づいて) 今、迎えの自動車がやってくるわ。あの人達は泥棒だし、危険だからよそで待っているけど、お姉さん呼び寄せるためにここへ今自動車が到着するわ。

カオル ……本当? レイ子さん。

レイ子 ええ。

カオル、じっとレイ子を見つめるが、急にかん高く笑い、すぐ笑いをとめて窓際に行き外を見る。

カオル (不安そうに戻りながら) 支度をしなきゃ。何と何を持って行ったらいいのかしら、わたし……、憲法と、刑法も必要ね。

マチ子、戻ってくる。

マチ子 (きよとんとして) 電話、こわれてる。

カオル (上手から出ながら) ピッコロがナイフで切ったんですもの。

マチ子 ナイフで? ……カオル、元気そうになったね。やっぱりおかしいことはおかしいけど。

レイ子 今、迎えの車がやって来るといったの。

マチ子 迎えが? どこから。

レイ子 ピッコロさんがカオル姉さんのために車を……

マチ子 そんなことって欺されたと知ったら、なおさら……

レイ子 本当に来るんですもの。

マチ子 本当に? ……あんた、あんたも……。念のために訊くけど、ゆうべの三人は、

レイ子 泥棒よ。

マチ子 (あきれて) まあ、あなたまで…… (嗚咽し始める)

レイ子、窓際に行く。そして外を眺めているうち、はっとしてあわて始め、カーテンを閉めようとする、カオルが入ってくる。

カオル (マントル・ピースの上を見て) 確かにここへ置いた筈だけど。(床に積まれている書籍を一冊ずつあらためながら暖炉へ投げ入れる) ないわ。…… (出て行くこうとするが、ふと窓際に行く) まだ来ない? 車は。……あら、来たわ! ……レイ子さん、ほら。

レイ子 (低い声) どうしたんでしよう。

カオル 危険を冒して、直接迎えに来てくれたのよ、わたし達を。

マチ子、おどろいて立上る。

カオル ピッコロさあん……、手を振ってるわ。イカケ屋さあん。

マチ子 (窓から身をのり出し) ……まあ。

カオル 迎えに出ましよう、玄関へ。鍵をあけてあげなくちゃ。(出て行く)

マチ子 また招んだの、あなた。

レイ子 いいえ。

マチ子 どうしてまたやって来るの。

レイ子 わたしにもわからないわ。……もしかしたら、  
マチ子 もう家には入れません。（出て行く）

——間——

イカケ屋とピッコロが荒々しく入ってくる。そのあとから、カオルが喜々として、マチ子は恐怖の表情を浮べて戻ってくる。

カオル （ピッコロの手をとって）こっちへいらっしやい。一緒に支度をしましょう。

ピッコロ、カオルの手を振り離す。

イカケ屋 ピッコロ、俺と一緒に来い。

イカケ屋とピッコロ、上手の扉から出て行く。

イカケ屋のどこか人のよさそうなところ、ピッコロの少年らしい様子は消え、二人とも狡猾そうな敏捷な動き。

ギロチン窓ががたと音を立て、キリストがそこを乗り越えて侵入する。

キリスト （レイ子に向って）改めてお邪魔しにやって来た。……先ず、ゆうべ遠慮した金を出してもらお

う。

レイ子、書棚から一冊の本を抜きとり、その中からハトロンの封筒を取出してキリストに手渡す。マチ子とカオルが上手の方へ行こうとすると、キリストが大手をひろげて立ちふさがる。

キリスト　ここへおとなしく坐っていないな、しばってもらいたくはなからう。(二人を両手で引張り、長椅子に乱暴に突きとばす)

レイ子　(鋭く) 乱暴はやめて!

マチ子　(大声で) 悪者! 泥棒!

キリスト　あつはは……、そう来なくちやな。やっと朝めしが食えそうだ。

カオル　ミルクを上げましょうか。

キリスト　おや、おまえさんはまだ友達づきあいをしてくれる気か。

カオル　永久に。

キリスト　げえ。

カオル　わたしは信じてますもの。

キリスト　何を?

マチ子　早く出て行って。取るものを取って、さっさと行ってしまっ! いやらしい。けだもの。ああ……

……(烈しく泣きいる)

キリスト　われは始めなり、終りなり……。手間はとらせねえよ。

マチ子 (泣きじゃくりながら) 始めなり、終りなり。渴く者には、あたい 価なくして生命いのちの水の泉より、飲むことを許さん。われはその神となり、彼は我が子とならん……。

カオル (優しく) お姉さん……。

キリストはしゃべりながら部屋中を歩き廻って、書棚の本をほうり出したり、小箱をあけて見たり、油絵の額を落して裏を調べたり、部屋は次第に乱雑になって行く。

レイ子 病院の車が来る前に出て行かないと、捕まるわよ。

キリスト 大丈夫だ。このお二方より俺たちの方が信用されるだろうさ。

マチ子 病院だって？

レイ子 (あわてて) いえ……

キリスト あっはは……、俺たちが丁重にお送りしてやらあ。

レイ子 わたしが、本当のことをいうわよ。

キリスト 俺たちが泥棒だったか。……おまえさんも一緒に連れて行かれるだろうよ。氣ちがい病院へな。

マチ子 (立上って) わかったわ。(レイ子に) 迎えに来るってカオルを欺したのは、車がやってくるって

いったのは、病院の車なんだね。あんたはカオルとわたしを入院させようとしているんだね。

カオル 入院……？

マチ子 そうよ。わたし達を病院へ入れてしまって、そのあと、一人で気ままに暮そうっていうのよ。

カオル そうなの、レイ子。



レイ子 知らないわ、わたしは何にも。(うつむく)

マチ子 (皮肉に) やっぱり良心がとがめるんだよ。

カオル もしそうだとしたら、あんたは、ぐる、ぐるになっているんだね。キリストやイカケ屋と……。

マチ子 ぐる、ぐるに？

カオル そうよ。邪魔なわたし達を追い払ってから、泥棒たちの国へ行って女王になるつもりなのよ。

キリスト あっはは……、面白い。やってくれ、俺たちは何をいわれても元々だ。

マチ子 レイ子、あんたはわたし達の妹だろ。お母さんが死んでから、わたしはあんたのことを母親のような気持で可愛がってきたんだよ。それなのに……

カオル わたしは欺されはしないよ、レイ子。病院へなど行くもんですか。あなたにピッコロをとられてたまるものですか。

ピッコロがおびただしい衣類をかかえて戻ってくる。

カオル ピッコロさん……(飛びつく)

ピッコロ 邪魔しねえでくれ。(床に品物をほうり出し、また出て行く)

カオル、ピッコロに続いて出て行く。マチ子は、着物を一枚一枚拾って眺め胸にいっぱいかかえる。イカケ屋、盗品をかかえて戻ってくる。

イカケ屋 キリスト、手伝ってくれ。（部屋の真中に品物を置き、煙草を床の上で踏み消す）……こっちへよこしな。（マチ子の持っている着物をひったくる）

マチ子 いや、離して、離してったら。（キリストが古風な着物をひろげるのを見て、イカケ屋から離れ、それに飛びついて行く）やめて、それは、この着物は……

キリスト （着物をひったくり）どうだい、イカケ屋。

イカケ屋 （簡単に検分して）やめとけ、虫が食ってる。

キリスト 助かったな。（マチ子に投げてやる）

マチ子 （胸にかかえて戻りながら）わたしの打掛、おばあさんの形見……。

ピッコロとカオルが品物を持って入ってくる。

イカケ屋 ピッコロ、俺がほうる物を包みにしろ。

カオル （いそいそとして）わたしも手伝うわ。

マチ子 ……カオル。（イカケ屋が一つの小箱をあけるのを見て飛びついて行く）それは駄目、紙よ、唯の紙つきれよ。

イカケ屋 うるさい。（カオルを突き飛ばし、箱の中から手紙らしい束を出してまき散らす）

マチ子は手紙を拾っているうちにその中の一枚を読み始める。キリストがメダルのようなものを眺めているのをカオルが気がつく。

カオル それはわたしが持って行くの。返して。

キリスト 待てよ。

カオル それはわたしの……

キリスト 離せたら。

キリスト、カオルの手を振り離そうとして強く力をこめ、カオル悲鳴を上げる。マチ子は我にかえって顔を上げ、遂に泣き出してしまう。

キリスト (イカケ屋に) これは？

イカケ屋 ……返してやれ。メツキだ。

キリスト ほら。(床にメダルを投げる)

カオル (メダルを拾ってピッコロに差出す) これ、あなたに上げる。

ピッコロ いらねえよ。

カオル 上げる。

ピッコロ いらねえたら。

カオル 恥かしいのね、あなた。

マチ子 (叫び声) ああ…… (小さな陶器の皿を持ったキリストに飛びついて行く) 駄目、それは駄目……

カオル、ピッコロの胸のポケットに無理にメダルを入れる。

ピッコロ いらねえたらわからねえな。(メダルを外へほうり出してしまおう)

カオル あ、ばか……

キリスト おじいさんの形見か。(返そうとする)

カオル、あわてて出て行く。

イカケ屋 (皿を横取りして) ちょっと見せろよ。……伊万里焼だな。……貰っておこう。

マチ子 駄目よ、返して。(叫び声) ああ……(イカケ屋が取上げた次の品物に飛びかかる)

イカケ屋 (大声で) うるさい! ……キリスト、しょうがねえ、ふんじばろう。

キリスト うむ。

イカケ屋 ピッコロ、紐をかせ。

ピッコロ、ポケットから麻紐を出して渡す。キャーキャーいうマチ子を三人がかりで椅子にしばりつけようとする。レイ子はずっと傍観者のように黙って眺めている。カオルが戻ってくる。

カオル ……待って、イカケ屋さん。やめて、そんなことしたらお姉さんが可哀そう。ねえ……、ピッコロ、あんたまで! 離して、やめて。

カオル、三人とからみ合う。

イカケ屋 ついでだ、ピッコロ、こいつもだ。

ピッコロ、ちよつとためらっているが、紐をもう一本取出す。

カオル ああ、ばか、何するの。あなた達の仕事を手伝ってるわたしを……離して、離してったら。ひどいわ、ああ、ピッコロ……。わたしは仲間よ、やめて。

三人はやつとマチ子とカオルをしばりつける。

カオルは子供のように泣き出す。

キリスト (レイ子に) このまま車へ乗せれば、世話がなくていいだろう。

マチ子 レイ子、なぜ黙ってるの。平気なの、あんたは。

カオル (泣きながら) ぐるよ、レイ子はぐるなのよ。……ピッコロ、痛いわ、離して。

マチ子 キリスト……、まむし！ レイ子、死んでおしまい。おまえなんか病院へお行き。おまえがお行き。

カオル 裏切った、裏切った……。ピッコロも、レイ子も。

マチ子 死んでおしまい！

イカケ屋が風船を一つ割る。大きな音と、そのあとの沈黙。

イカケ屋 静かにしろ。

レイ子 あなた達、楽しそうね。

キリスト 労働のよろこびっていうやつだ。

イカケ屋 ちげえねえ。あっはは……

イカケ屋、ふと気がつき、羚羊の剝製に近づいてその口をこじあけようとする。マチ子が金切声をあげ、イカケ屋が彼女を黙らせようとして飛んでくると、鈍いが底力のある大音響がひびく（火山の噴火）。泥棒たちも娘たちも一瞬沈黙して恐ろしい音をきいている。

マチ子 山が噴いてる。……羚羊の怒りが通じたんだわ。

カオル 久し振りね。

マチ子 もっと、もっと噴いて。熱い灰でこの家を埋めて。熔岩、どろどろの赤い熔岩、ここまで流れておくれ。みんな押し流して、みんな殺して！ こんな下司な人間たち、早く殺して。みんな滅ぼしてくれらなら、わたしの命を奪ってもいい。もっと噴いて、もっと、もっと。

イカケ屋、また羚羊に近づく。

マチ子 (イカケ屋が剥製に手をかけた時) ああ、泥棒！ 羚羊にさわっちゃ……

キリストが、我慢がなくなかったようにマチ子のところに走り寄り、彼女に猿ぐつわをはめてしま  
う。

カオル キリストさん、何てことをするの。……レイ子。なんで黙ってるの。レイ子！

今度はイカケ屋がとんで行ってカオルに猿ぐつわをはめる。

イカケ屋 これで静かになったが、こっちの仕事も終わったな。

レイ子 まだ終わらないわ。

キリスト からむのか、また。

レイ子 この家に火をつけて全部灰にしてしまう仕事が残ってるわ。

イカケ屋 狂ったな、最後の一人も。

キリスト それはおまえさんが自分でやってくれるんだろう。俺が戻ってきたのは、あの姉さんにいわれた  
ことを思い出しただけのことだからな。せいぜい自分たちの儲けを……

車の音が聞える

ピッコロ 来たらしいぜ。(窓からのぞく) そうだ。

キリスト よし、少しかたづけろ。

車がとまる。

イカケ屋 大丈夫か。

キリスト (口に手をあててピッコロに) 外しておけ。(イカケ屋と一緒に出て行く)

レイ子も出て行く。ピッコロ、マチ子とカオルの猿ぐつわを外す。マチ子はすぐに泣き出し、カオルはぼかんとしている。

カオル (小声で) ピッコロさん。

ピッコロ …… (窓から外を見ながら黙っている)

カオル ピッコロさん、なぜ黙っているの。あなたは、足を洗うって行ってたわね。それはどうでもよかったんだけど、あなたは どうしてわたしの眼を見てくれないの。恋をするのがこわくなったの。

噴火の音。(短いが今までに一番大きい) キリストとイカケ屋、病院の係員が二人、どやどやと入っ



てくる。

男A 凶暴性はないっていうお話でしたが。

キリスト ええ。ゆうべからなんですよ。今朝になって一層ひどいんで、可哀そうだとは思ったんですが……

マチ子 その人達は泥棒です！ 警察に電話をかけてください。

カオル ピツコロ、綱を切って！

マチ子 その包みを、あけて見て。わたし達のものばかりよ、盗んで行くところよ。  
キリスト このざまでねえ。

カオル 病院はいや、逃げるのよ。早く紐を切って。

男B このまま車へ運ぶか。

男A うむ、その方が面倒が少ないかな。

マチ子 電話を見てちょうだい。この泥棒たちが切ったんです。

カオル 泥棒の国の方がいいわ。病院はいや。

マチ子 信じてちょうだい。調べてちょうだい。つかまえて。泥棒よ、泥棒なのよ。

わめく二人を男たちが椅子のまま運ぼうとする。ふとキリストが何か気がついたようにイカケ屋に耳打ちする。彼が下手の扉から出ようとすると、レイ子が入ってくる。  
イカケ屋、拍子抜けしたように戻る。

レイ子 (誰にともなく) 御苦労さま。

マチ子とカオルは、足をばたばたさせ男たちは手こずっている。

レイ子 ちょっとお待ちになって。(ピッコロに) ナイフを。

ピッコロ、ちょっとためらっているが、レイ子にナイフを渡す。レイ子はそれで姉たちのいましめを切り自由にしてやる。そして二人に別々に何か耳打ちをし、白いハンカチーフを一枚ずつ手渡す。

マチ子 (匂いをかいで) ……いい匂い。

カオル 行きましょう、お姉さん。

二人は納得したものの如く、おとなしく出て行く。男Bとイカケ屋、ピッコロが続いて出て行く。男Aはレイ子に書類の署名をしてもらってから出て行く。

キリスト 見事だな。……どんな事を耳打ちしたか、見当はつくが。

レイ子、窓際に行つて外を眺める。

レイ子 (外を向いたまま) わたしが平気な顔をして姉たちを送り出せるのは、あなた方のお蔭よ。  
キリスト 俺たちの？

レイ子 ええ。わたしが、まるで他人のように、今まであの二人に附添っていた看護婦のように冷静な気持ちで姉たちを入院させることができるのは、あなた達が来てくれたせいよ。  
キリスト どさくさまぎれだったからな、とにかく。

レイ子 いいえ。

キリスト あの二人が正気じゃねえってことがはっきりしたからか。

レイ子 いいえ、あなた達が、わたしの何か一つのを壊してくれたからでしょう。それは大切なものだったのか、それとも余計なものだったのかは分からないけれど、わたしの中にはもう何も残っていないような気がする……。

キリスト 気軽になれたってわけか？ それじゃあ。

車がスタートする音。

沈黙。……イカケ屋とピッコロが戻ってくる。

イカケ屋 (キリストに) 金は、もらってあるな。

キリスト、うなずいて胸を軽くたたく。

イカケ屋 ピッコロ、おまえは包みを一つ持って先へ行け。

ピッコロ 駅で待ち合せか。

イカケ屋 汽車が来たら乗っちゃまえ。(レイ子に) さっきからおかしいと思ってるんだが、おまえさん方、

宝石は一つも持っていないねえのか。

レイ子 ……探してごらんなさい。

イカケ屋 ふん……(荒々しく背を向けて上手へ行く)

ピッコロ じゃ行くぜ、兄貴。

イカケ屋 (出ながら) ああ。

ピッコロ、包みをかかえて出て行こうとするが、カオルがくれたメダルを見つけて拾う。

キリスト やっぱり欲しいか、そのメダルが。

ピッコロ、キリストを振り返り、メダルを捨てて部屋を出て行く。

キリスト あっはは……。(床に落ちていたショールをひろげて見る。そしてレイ子にそれをかけてやりながら) あるのか、宝石……

レイ子 探さないの、あなたは。

キリスト (レイ子を見つめて) 探しているんだ。

レイ子 (しばらくキリストの視線をうけとめている) わたしの眼の中になんかないわよ。(シヨールを外し、歩き出しながら) 戻ってきた甲斐がないわね。

キリスト 収穫は充分だよ。宝石が出なくたって。

レイ子 いいえ、あなたのことよ。わたしはいろんな物を盗まれて随分身軽になったけれど、あなたは荷物を背負ってこれから街へ帰らなくちゃならないでしょう。……どうぞ、お気をつけて。

キリスト おまえさんこそ、あんまり身軽になりすぎてふわふわ宙に浮かんじまわないように気をつけるんだな。俺たちは一晩でおまえさんをカナリヤに、どこへでも飛んで行けるカナリヤにしてやった……。

レイ子 ところがカナリヤは、あなたの希むところへは飛んで行かない……

キリスト 俺は何も希んじやいねえ。こうなりやいいともあなりやいいとも思っちゃいねえ。おまえさんのようにわけのわからねえものをじっと待っちゃいねえ。

レイ子 わたしは何にも待ってはいないわ。花火を見る時のような瞬間の心ときめきは感じるけれど、そんなものはすぐ消えてしまう。花火と同じように十秒とたたない間に消えてしまう。あなたは確かにその十秒の間わたしの前に立っていたような気がするけれど、今はもう……

キリスト、ふと気がつき風船の方を眺め、近づいてその紐を持ち上げる。そして錘にしてあった小箱の蓋をあける。次に既に割ってしまった二つの風船の錘の小箱を引き出す。箱の中には宝石が二つか三つずつ入っている。

キリスト (宝石の一つを陽に透して見ながら) 戻って来た甲斐があったな、お嬢さん。

イカケ屋、戻ってくる。

イカケ屋 (入りながら) 駄目だ、あきらめた。…… (キリストのもっている宝石を見ておどろきの表情)  
まけたな、今度だけは。

キリスト 高え汽車賃もムダにやならなかったろう。

イカケ屋 どこにあった？

キリスト、部屋の隅を頭で示し、箱についた風船を振って見せる。

イカケ屋 ふーん。(宝石の一つを手にとる)

レイ子 それと、もう一つ、エメラルドがあるでしょう。その二つだけは残して行って。

キリスト あとは屑か。

レイ子 いいえ、その二つは姉たちの……

キリスト、いきなり下に転がっている花瓶を蹴とばす。レイ子は黙りこみ彼を見つめる。

キリスト 何かと勘ちがいするなよ。俺たちは、泥棒なんだ。

イカケ屋 俺たちは、泥棒なんだ。一足先に行くぜ、キリスト。  
キリスト ああ。俺ももう引き揚げる。

イカケ屋、ちよっと羚羊の首に目を向けるが、すぐ出て行く。キリスト、宝石をしまい、荷物を持ち上げる。

キリスト (風船をもったまま下手へ行きながら) おまえさんはとうとう泣き顔ってえものを見せなかったな。……けれど一人になりや……

レイ子 同じでしょう。

キリスト、戸口で立ちどまり、レイ子の方を振り返る。

レイ子 さようなら。

キリスト (笑い出して) 考えると俺もおかしかった。おまえさんにかわいい声でさようなら。(ゆっくりとレイ子に近づく) ……俺はここを出たら、口笛を吹いて歩いて行く。もしおまえさんに俺と一緒に歩いてくる気があるなら、俺の口笛が聞えているうちか、聞えなくなってから自分で十数えるまでに、その風船を突き破れ。風船の割れる音がしたら、俺はもう一度戻ってくる。

キリスト、扉の方へ行きかけるが、身をひるがえしてギロチン窓を越えて出て行く。残ったレイ子は

風船を抱いて長椅子にかけ、キリストの吹く口笛をきいている。レイ子の両手は幾度か力がこめられるが、ついに口笛は聞えなくなり、レイ子は両手を離す。指に巻いた紐が伸び、風船は高く上がる。——低い噴火の音。

レイ子 (椅子にねそべり、低く呟く) ……わたしがどんなにあなた方のことを思っているか、わかっているの。宜しいの。この三神家は、破産しかかっているんですよ……

無意識のうちに、レイ子、風船の紐を離す。空に舞い上がる風船。

—幕—

底本.. 『八木柙一郎戯曲集 第一巻』  
白水社

1992年5月10日印刷

1992年5月28日初版